

# 狩野永良の秘伝画法書について

山 下 善 也

## はじめに

手のひらサイズの小さな画帖に、京狩野の秘密がふんだんに盛り込まれている。何やらあやしげな書き出しをしてしまったが、京狩野の秘伝書のことである。

今から四十三年前、日本近世絵画史研究の泰斗、土居次義氏が、京狩野第六代の狩野永良による京狩野の秘伝書に関する論考を発表された<sup>(1)</sup>。

近年、その秘伝書とは別本の秘伝書が新たに見出され、平成二十一年度に京都国立博物館の館蔵品として購入された。筆者は、同じ狩野永良である。

本稿は、この新出の京博本秘伝書について全文翻刻を行ない、全容を報告しようとするものである。具体的には、次の順序で報告してゆくこととしたい。

本に言及して京博本との異同についてふれる。そのうえで、(3)で筆者狩野永良を京狩野の流れのなかにとらえ、永良による秘伝書の絵画史上の意義について若干の考察を加えたい。末尾に、京博本秘伝書の全文翻刻を掲載する。

## (1) 基本的な事項と全体の構成

京博本の「秘伝画法書」(図10・12・13および挿図。「秘伝書」と略称)は、紙本墨書・墨画、折本装で上下2冊からなり、帙に收められている。折りたたんだ状態での外寸は、各帖縦一八・一cm、横一二・二cm、まさに手のひらサイズである。各帖の表紙に短冊形の金箋の題簽が貼られ、上帖には「画伝 上」、下帖には「画伝 下」の外題がある。この「画伝」を作品名称とすることも可能だが、作品の特殊な性質をしめすべきという観点から、当館では「秘伝画法書」という名称で登録した。

各帖同じ丁数(二十丁=四十頁)で、表裏にわたって文章・図解がみられ、下帖裏は十頁で終わる(別表参照)。本紙はすべて等質で、

同じ古び方をみせており、当初のものとみてよい。紙継ぎ部分に墨書や画がまたがっており、目視するかぎり錯簡はないと判断される。

序文の末尾に「時ニ宝暦十三癸未年孟夏下旬／狩野縫殿助藤原永良謹白」とあり、白文方印「狩埜」朱文方印「永良印」が捺されている(図12)。これにより、宝暦十三年(一七六三)孟夏(四月)下旬、狩野永良(一七四一～一七七二)二十三歳のときの自筆本と分かる。筆者永良については、あらためて(3)で述べる。

序には、「画法について世間には様々な書物があるが、狩野派の祖である狩野元信から伝えられた秘密(の画法)は、他家には知られず、我が家系の古法眼元信から、松栄、永徳、山楽、山雪、永納、永敬、永伯、そして(私)永良まで伝えられた秘密の書である」(後出の翻刻参照、以下同)というように、本書の性質について述べたうえで、「其許(そもと)〔そなた〕が画道に執心しているので、この秘書一巻を写し相伝するものである。当家伝来の秘本を残らず見せる。書いていることと違ひ変えてはならない」と記す。

この「其許」とは、永良の署名のあとに記された「後藤行晴」で、この秘伝書を受けられた人物、つまり永良の門人ということになるが、後藤行晴なる人物については、今のところ詳らかでない。

全体の構成は、別表の通りである。「上帖」では、序文のあと二九頁までにわたって、牧谿・玉潤・高然暉・夏珪をはじめ中国の画家十五名について文章のみで記す。いずれも室町中期の『君台観左右帳記』に登場し、「中」の高然暉以外は「上」に位置づけられた画家たちである。秘伝書では、履歴等でなく、もっぱら各画家の画法について記されている。

そのあと、三〇頁以降、最後の一三〇頁まで、さまざまな画法が

図解され、注記がなされる。

まず、上帖表の三〇頁から最終四〇頁を経て裏につづき四三頁までは岩・水などの画法で、つづく四四～五二頁には、鳥の描き方が図解・注記される。飛ぶ鳥のさまざま姿態の変化(図13)や、枝にとまる鳥のさまざまな姿態の変化が、ぎつしりと描きこまれているあたりは、じつに興味深い。京狩野の作品に、これらの鳥の姿形がしばしばみられるからである。

五三～六二頁には、松・梅・桃・桜・海棠・桐・柳・棕櫚・楓・杉・楨・檜といった、さまざまな樹木の描き方がしめされる(図12)。ここで「カスリ」という語は、当時の用語と思われるが、樹木の樹皮の質感表現をしめすものであろう。このほか、別の頁で岩の質感表現について、我々が「皴法」と呼んでいる筆墨法を「衣紋」と呼んでいる箇所も処々に見られる。当時の絵画制作の現場での用語として、注意しておきたい。

六三～八七頁には、さまざまな人物の画法がしめされる。唐人物を中心とした老若男女貴賤等の人物の面貌の描き分け、身体のプロポーションの分割把握による画法、裸に衣裳を着せて描くという独特の画法がしめされ、立・坐臥等、姿勢による描き方が図解されている(図13)。ここで下帖に移り、八一頁から人物の衣紋線の描き方のさまざまをしめます。

八八～一〇五頁は和人物で、身分による面貌の描き分け、東帶姿・衣冠姿・直衣姿・闕脇姿・狩衣姿・十二单姿など有職故実に基づく描き分けがしめされている。

一〇六～一一三頁は、真・行・草の三体による山水の描き方、一四頁から下帖表最終の一二〇頁までには、楼閣の描き方について

## 秘伝画法書の構成

上帖の表

頁	図	内容	序文等
1		秘書序	
2		年紀、永良の署名、印章	
3		画法之事	
4		〃	
5		当家名画十五人傑出成所取用法	
6		各筆法事 牧溪	
7		玉潤	
8		高然暉、夏珪	
9		〃	
10		〃	
11		馬遠	
12		〃	
13		閻次平、舜舉	
14		〃	
15		〃	
16		子昭、顏輝	
17		〃	
18		梁楷	
19		〃	
20		李安忠	
21		〃	
22		李龍眠	
23		月山、毛益	
24		徽宗皇帝	
25		右十五人之名画ノ筆法まとめ	
26		〃	
27		〃	
28		〃	
29		〃	
30	図1-3	秘密圖式 岩三面之法	
31	図4-9	岩	
32	図10-12	岩	
33	図13-14	勢の滝、岩	
34	図15	大滝	
35	図16-17	滝川の水	
36	図18	波濤	
37	-19	波濤	
38	図20	渦	
39	-21	蛇籠にあたる波	
40	図22-23	岸にあたる波	

中国の名画家の画法

岩・水など

鳥

樹木

人物

頁	図	内容	人物
69	図75-78	羅漢、天夫天童、仏像	
70	図79-82	天女・菩薩、觀音、官女	
71	図83-87	官女正面、眠る男の顔	
72	〃	官女横顔、嘆く顔、大笑いの顔	
73	図88	人物形之秘密（人物割法）	
74	図89	人形衣紋付様ノ事（裸に衣裳着せる）	
75	図90	座ス人形	
76	〃	〃	
77	図91	臥体	
78	〃	〃	
79	図92	横向ノ座スル人形	
80	〃	〃	

下帖の表

頁	図	内容	人物
81		人形衣紋筆当り之事	
82		〃	
83	図93	衣紋アタリ所ノ事	
84	図94-95	筆意 あたる筆、おさゆる筆	
85	図96	筆意 梁楷様	
86	図97	聖賢、官人の筆意	
87	図98	官女の筆意	
88	図99-100	和人形之事 公卿	
89	図101-102	隨人、雜人	
90	図103-105	官女、童子	
91	図106	毛絹 十二ヒダ	和人物
92	図107	束帶之衣紋	
93	〃	〃	
94	図108	衣冠姿	
95	〃	〃	
96	図109	直衣姿	
97	〃	〃	
98	図110	闕脇姿	
99	〃	〃	
100	図111	狩衣姿	
101	〃	〃	山水
102	図112	官女十二单（立ち姿）	
103	〃	〃	
104	図113	官女十二单（坐る姿）	
105	〃	〃	
106	図114	山水并ニ屋形ノ法 真山水	
107	〃	〃	
108	図115	行山水	
109	〃	〃	
110	図116	草山水	
111	〃	〃	樓閣
112	図117	山水作法物之墨所	
113	〃	〃	
114	図118	屋台之事 真之唐屋台	
115	〃	〃	
116	図119	行之屋台	
117	図120	草之屋台	
118	図121	和之屋台御殿	
119	〃	〃	
120	図122-124	三栖ノ仕立様	

下帖の裏

頁	図	内容	獸
121	図125	犬物之法 丈割	
122	〃	〃	
123	図126	犬物之法 毛書	
124	〃	〃	
125	図127-128	犬物之毛書、鳥之毛書 (空白)	
126			
127	図129-131	三玉宝珠の伝	
128	〃	〃	
129	図132	火煙の伝	
130	図133	〃	

※ 頁は、通番号を振った。

※ 図No.は、翻刻の（図\*\*）に対応

頁	図	内容	人物
41	図24	大滝に回る波	
42	図25	勢の滝に向かう波	
43	図26-27	川の岸際の波、寄する波	
44		諸鳥類秘密之事	
45	図28-29	菱形を組み合わせた整形法など	
46	図30	羽の種別と羽数について	
47	図31	鳥の飛ぶ姿の変化	
48	〃	〃	
49	図32	鳥が枝等にとまる姿の変化	
50	〃	〃	
51	図33-34	鳥の姿勢、頭と尾の関係など	
52	図35-37	鳥の足の描き方	
53	図38	諸木カスリの事、松	
54	図39-40	〃	
55	図41	梅の木カスリ	
56	図42	桃の木カスリ	
57	図43-44	桜木のカスリ、海棠	
58	図45	桐木のカスリ	
59	図46-47	柳、棕櫚	
60	図48-50	楓	
61	図51	杉	
62	図52-53	楨、檜	
63	図54	人物之作法ノ伝	
64	図55-58	面筆当り所ノ伝	
65	図59-62	面貌—老人、若人、老母、童子	
66	図63-66	顔—正面、俯く、仰向く、横顔	
67	図67-70	七分程後面、真後向、九分程、吹出す	
68	図71-74	福音の面、毘沙門天の面、祖師の面	

図解・注記がなされている。

ここで下帖裏に移り、一二一～一二五頁には、「犬物之法」つまり走獸としての馬の描き方、毛描きの仕方をしめし、最後一二七～一二八頁には宝珠、一二九～一三〇頁に火焔の描き方をしめして頁を終える。以上が、秘伝書の構成と概要である。

## (2) 工織大本の存在

冒頭に述べたように、京博本出現の約四十年前に、土居次義氏によつて、同種の秘伝書（土居氏は「画伝集」と命名）が紹介されていた<sup>(1)</sup>。当時は土居氏が架蔵させていたが、現在、京都工芸繊維大学に所蔵されている（以下、工織大本と呼ぶ）。

土居氏の論考は、工織大本のうち人物画法、とくに着衣の下に裸身が白く描かれていることに注目したものであつた。円山応挙の人物画には、はじめに裸体を描き、その上に着物をきせるように描く人物画法があつたことが知られていた。土居氏は、その画法は応挙の創始になるものではないとし、先駆ける例として狩野永良による工織大本の例を紹介されたのであつた。なお、そうした特殊な画法の例は、さらにさかのぼる。かつて私は、中国・明初（十四世紀）の『輟耕録』卷第七に収録される元代後期の画家、王淵の逸話を紹介し、裸体上に衣服を描く画法が、中国の元時代後半から明時代初期にかけてあつたことを指摘した。<sup>(2)</sup>

いずれにせよ土居氏の論考は、工織大本の一部、人物画法に限る紹介だった。幸い、本稿発表と同時に、多田羅多起子氏が、工織大本について全文翻刻をふくめ詳しく述べる予定であり、ようや

くその全貌を現わすことになる。<sup>(3)</sup>

工織大本は一帖で、全七十六頁、京博本より頁数はだいぶ少ない。序文末に「季宝暦十三癸未年蘭穂上旬 狩野縫殿助藤原永良謹白」とあり、宝暦十三年（一七六三）蘭秋（七月）上旬に永良がつくつたものと分かる。宛先は「武川善治郎良雪」。この人物については、多田羅氏の論考<sup>(3)</sup>に知見がしめされるとのことなので、それをご覧いただきたい。京博本は前述したように宝暦十三年四月下旬、後藤行晴に与えられたものだった。工織大本は、その二ヶ月余後、別の門人に与えられたことになる。

工織大本も、序文のあと二八頁まで、中国の画家十五名について文章のみで画法を記す。若干の差異はあるものの、京博本とほぼ同じ記述である。そのあと、二九頁に石の三面法、三〇～四六頁に人物の画法、四七頁に宝珠・火焔の描き方、と京博本にみられた図解がしめされる（人物碁盤割の法が工織大本のみに登場）。四八～五四頁には竜・虎の描き方がしめされるが、これは京博本には見られない。五五～五八頁には馬、五九～六〇頁には鳥の描き方がしめされ、傍書は異なるものの、これらは京博本にも登場する。六一～七四頁には、滝、海の波、渦、川や池の水、滝の波などを図解。いくつかの異同はあるものの、京博本にも登場するものである。七五～七六頁、木の「カスリ」で頁を終える。

京博本になく工織大本にある図、その逆（和人物、飛ぶ鳥の変化、枝にとまる鳥の変化など）、あるいは他方の方がより詳しいものなど、京博本と工織大本には異同がある。両者を合わせみれば、多くの情報が得られることになる。多田羅氏の報告を、併せて参考いただきたい。

### (3) 京狩野と狩野永良

筆者、狩野永良（一七四一～七二）は、山楽・山雪に始まる京狩野の第六代。その研究上の位置について述べたい。

京狩野の画家たちで、初代の山楽、二代の山雪、三代の永納については、多くの作例が紹介されていた。多くはないが四代永敬の作例も知られ、五代永伯に関しては、ほんの数例ながら紹介作品があつた。それに対し、十年ほど前の時点では、永良画の紹介例は、土居氏紹介の工織大本以外皆無であつた。

三十一歳没という、あまりにも短い活動時期を考えれば、作品の絶対数が元々少なかつたと想像されるものの、一点も無ければ絵師像の検討はできない。こうした状況のなか、「親子犬図」一幅、「西王母・東方朔図屏風」六曲一双（いずれも静岡県立美術館<sup>④</sup>）、「鶴図」一幅、「山水図」一幅（東京国立博物館<sup>⑥</sup>）などが紹介された。江戸中期の京狩野の絵画がどのようなものであったか教えてくれる貴重な作例である。それらの永良作品には、沈南蘋の写生風や池大雅風などが見られる。

さらに平成二十年度には、京都国立博物館に「白梅群鶏図」が購入された（図11）。下方に雌雄の鶏と雛鳥、つまり鶏の家族、上方に白梅が配され、絹地に着色で、鳥も花も濃密かつ、ごくごく丁寧に描かれている。右下に「狩野永良筆」の落款と「狩埜」「永良印」の印（いずれも秘伝書序文と同印）、左上に「金門画史」の印がある。この作品は、一見して同時代の伊藤若冲（一七一六～一八〇〇）との関連を予想させるが、梅の樹幹や花には、当時大流行していた南

蘋流の影響が見られ、幹や枝の輪郭のねつとりした動きには、山雪以来の京狩野の伝統をうかがうこともできよう。出色の出来映えの優品であり、永良の画技の高さをしめして余りある。

徳川幕府成立によって、政治の中心は京都から江戸に移る。それにあわせて、探幽ら狩野本家筋も拠点を江戸の地に移す。明治以降の用語だが、彼らの系譜を「江戸狩野」と呼び、京都に残った山樂・山雪の系譜を「京狩野」と呼ぶ。

探幽ら江戸狩野一門の大活躍に対し、山雪をはじめとする京狩野の狩野派内における地位は、急速に低下していった。江戸中期、永良が京狩野を継ぐ頃には、風前の灯の状況にあつたようだ。

そのようななか、秘伝書制作の六年後、明和六年（一七六九）、永良は九条家に抱えられ、翌年、扇絵を毎月描いて宫廷に献上する職（御月扇御用）を獲得、以降、この職は京狩野家に代々引き継がれていくこととなる。土佐家・鶴沢家が勤めていた御月扇御用に仲間入りしたわけだが、土佐家は十人扶持、鶴沢家は五人扶持と銀三十枚に対し、狩野家は銀十五枚にすぎない待遇であり、京狩野家に対する扱いの低さがしめされていた。<sup>⑦</sup>凋落した京狩野を引き継いだ永良は、同家復活をめざし努めていたにちがいない。ただ、それを成し遂げるには、三十一歳という死は、あまりにも早過ぎた。

おわりに

永良は、京博本・工織大本ともに序文で、「(この秘伝書は) 元信から、松栄、永徳、山樂、山雪、永納、永敬、永伯、そして（私）永良まで伝えられた」もの、と記している。

狩野元信（一四七六～一五五九）以来のものであるという部分はきわめて疑わしいが、土居氏が言われるよう、永良以前、比較的はやい時期から伝えられたものと想像できるだろう。『本朝画史』の編纂をはじめとして諸画論や諸図様がさかんに考証整理された狩野山雪（一五九〇～一六五一）・永納（一六三一～九七）父子の時代からと想定しておきたい。

狩野永納編『本朝画史』には、自派の存在主張がこめられていると指摘される。<sup>(8)</sup> 元信以来狩野派の本流を京狩野が引き継いだように説く秘伝画法書の序の記述にもまた、自派の存在主張への強い意識が反映しているにちがいない。

正徳二年（一七一二）に著され享保六年（一七二二）に出版された林守篤『画筌』は、江戸狩野の画法を公にしたものとして知られ、永良より三十年あまり後の寛政二年（一七九〇）の狩野梅笑筆「手習画卷」は、江戸狩野の秘伝書である。<sup>(9)</sup>

それら江戸狩野に伝えられた画法との比較を通じて、両者の違いを培り出し、京狩野の画法の特質をあきらかにする必要があるが、今回は、新出の京博本の全容を公開することに力を注いだ。そうした比較検討や、秘伝書の個々の内容については、あらためて論じる機会を持ちたいと思う。

永良の秘伝書は、狭くは京狩野を研究する上で、広くは近世絵画を研究する上で興味のつきない資料である。だが同時に、絵画作品として鑑賞することも充分できる。紙上に展開する筆描や墨の濃淡は、まさに京狩野の伝統を継承して美しく力強く、それ自体、作品としての魅力をたたえているからである。

#### （註）

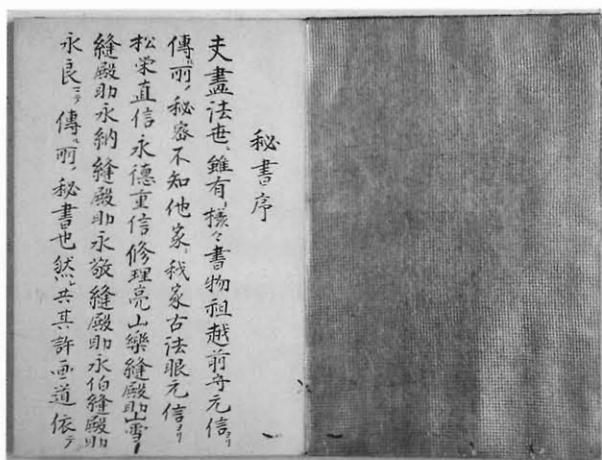
- 1 土居次義「『画伝集』の人物画法」「日本美術工芸」三五九、一九六八年（『近世日本絵画の研究』美術出版社、一九七〇年に再録）
- 2 摂稿「身体表現小考—日本絵画における対象把握の問題として—」「からだのイメージ」展図録 静岡県立美術館、一九九一年
- 3 多田羅多起子「資料紹介 狩野永良『画伝集』」「美術フォーラム21」第23号、二〇一一年
- 4 摂稿「不遇な実力派たち 山樂・山雪と京狩野」「狩野派決定版」「別冊・太陽 日本のこころ一三二」平凡社、二〇〇四年
- 5 「財団法人諸戸会所蔵品展—狩野派の絵画と茶道具—」展図録 桑名市美術館、二〇〇四年
- 6 脇坂淳『京狩野の研究』中央公論美術出版、二〇一〇年。脇坂淳氏は、山樂から永岳にいたる京狩野各代についての詳細な研究を発表され、永良の秘伝書についても言及されている。また、文政二年（一八一九）序の『扁額軌範』巻一掲載の図から、八坂神社に奉納された絵馬「玄宗楊貴妃図」が永良筆と分かることを指摘されている。
- 7 脇坂淳『京狩野の研究—京狩野家資料』大阪市立美術館紀要、第9号、一九九六年
- 8 楠原悟「江戸初期狩野派をめぐる問題—『本朝画史』と関連して」「MUSEUM」三四三、一九七九年、同「老梅園と山雪」「花鳥画の世界」
- 9 5 学習研究社、一九八一年、狩野博幸「近世京都画派—表現の冒險」「近世日本の絵画」所収 同朋舎出版、一九八六年など
- 19 田中敏雄「狩野梅笑筆 手習画卷について」大阪芸術大学紀要「藝術」一九九六年

#### （付記）

工織大本の調査にあたっては、京都工芸纖維大学教授並木誠士氏および田羅多起子氏のお世話をになりました。記して感謝の意を表します。

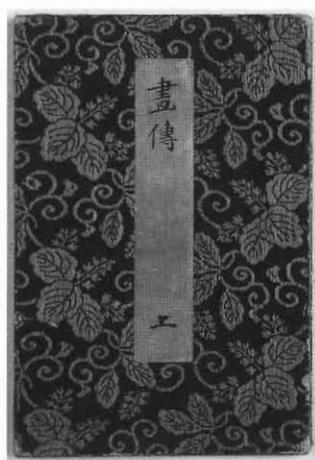
秘伝画法書 狩野永良筆

京都国立博物館蔵

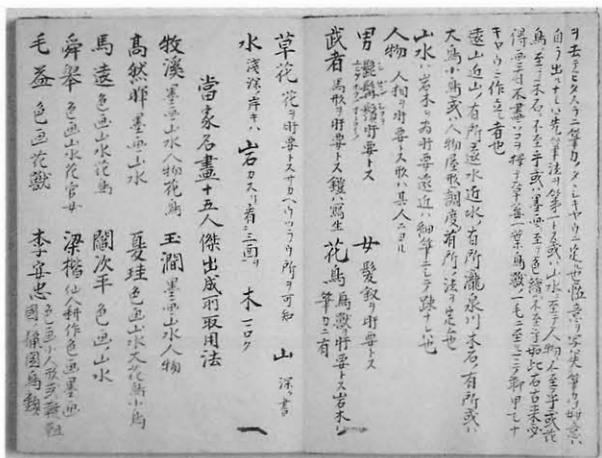


1

上帖表

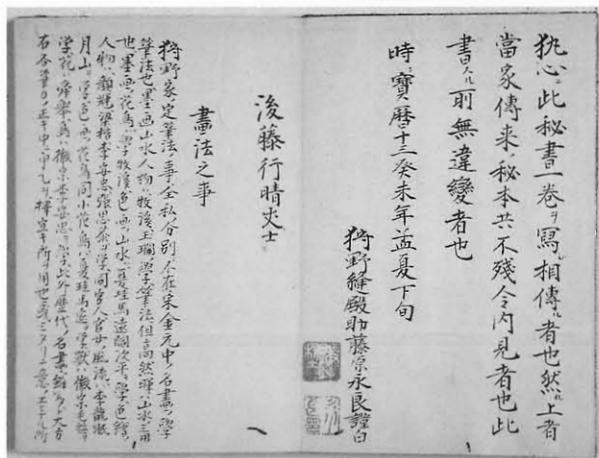


上帖の表紙



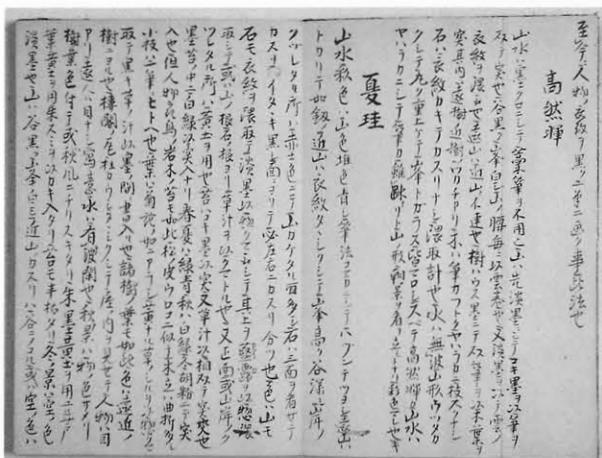
5

4



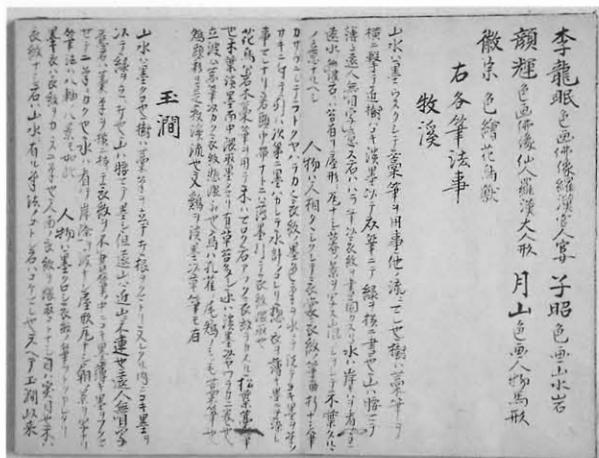
2

3



9

8



6

7

孰心此秘書一卷寫相傳者也然上者  
當家傳來秘本共不殘令内見者也此  
書尤列無違變者也

時寶曆十三年未夏下旬

狩野縫殿助藤原永良謹白

後藤行精丈

畫法之事

狩野家定筆法事全私分別不在宋金元中名畫之學

筆法也空山人物物象淺玉珊瑚筆但高麗筆山水用

也墨画花鳥等物象淺玉珊瑚筆高麗筆山水用

人物人物深描李思忠張昌黎等用金石風流李思忠

李龍眠畫傳像絵漢室家子昭色雪山小岩

顏廷臣畫傳像絵漢大秋月山色画人物馬軒

牧溪右各筆法事

牧溪

李

龍眠

畫

傳

像

絵

漢

室

家

子

昭

色

雪

山

小

岩

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

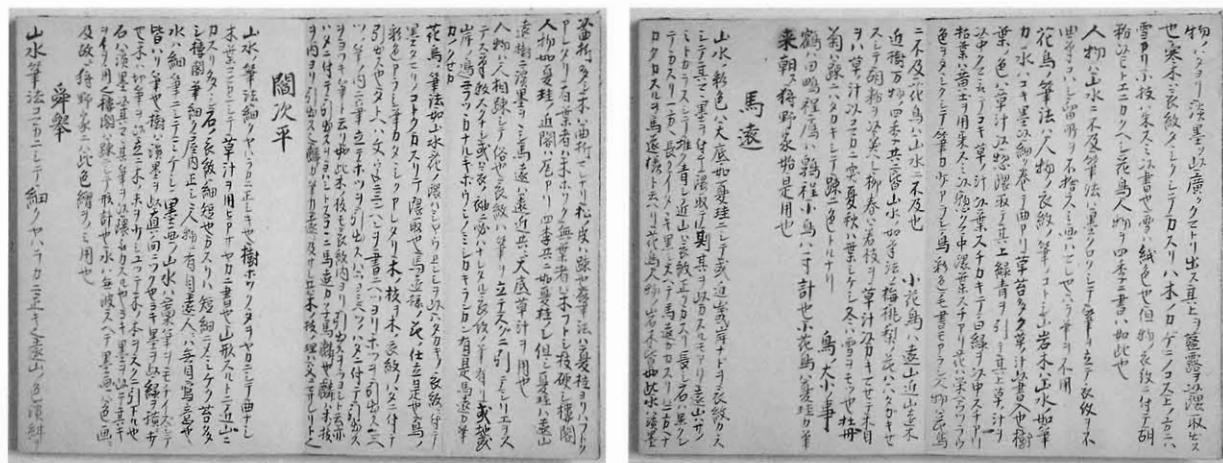
。

。

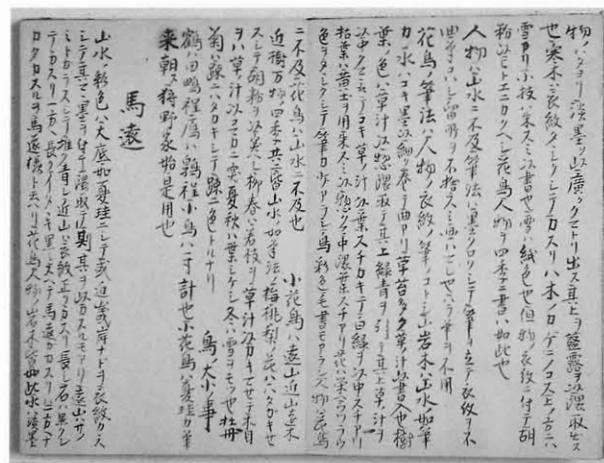
。

。

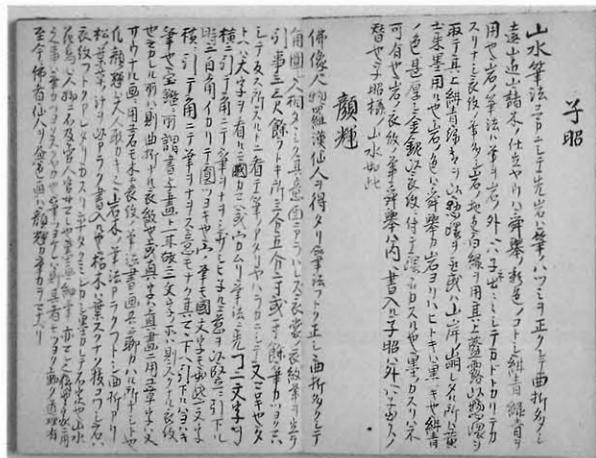
。



10



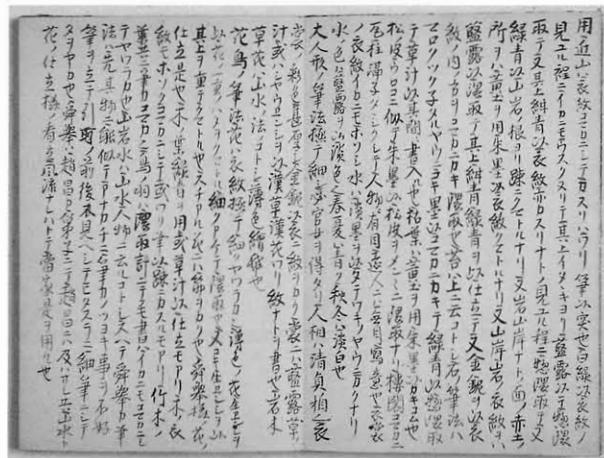
11



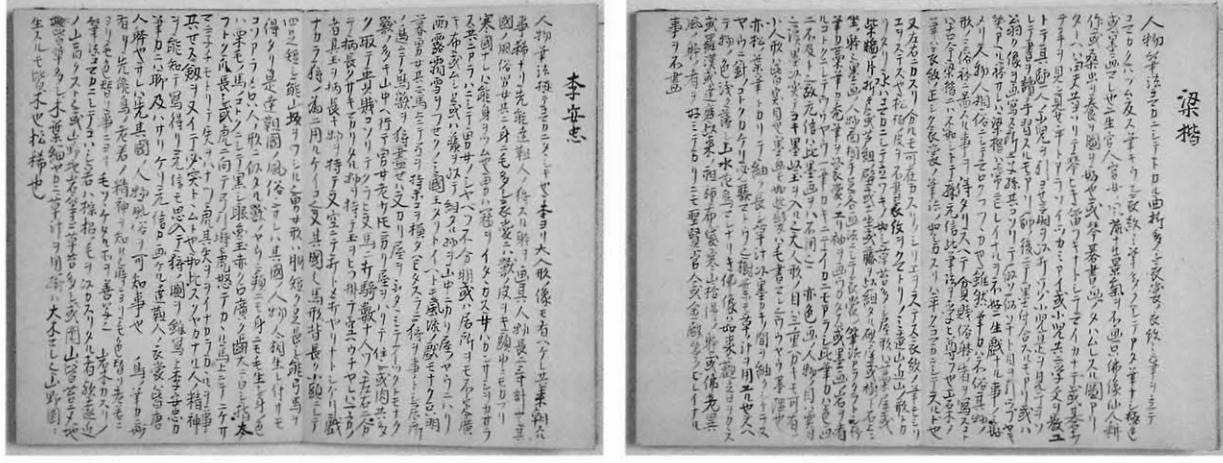
12



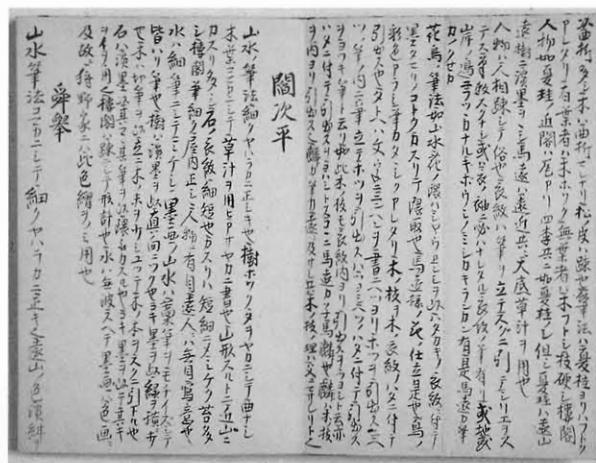
13



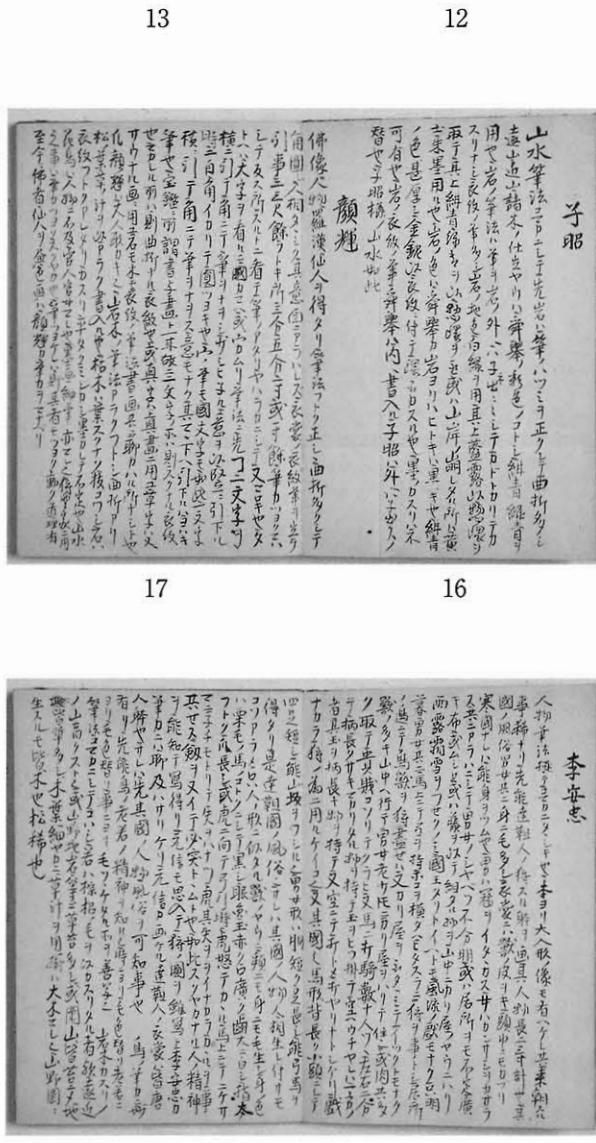
14



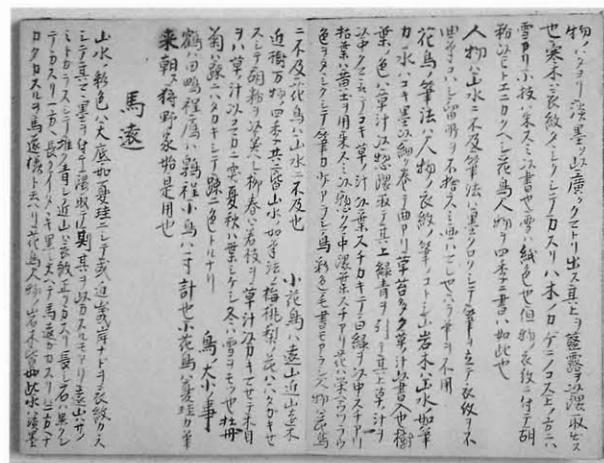
15



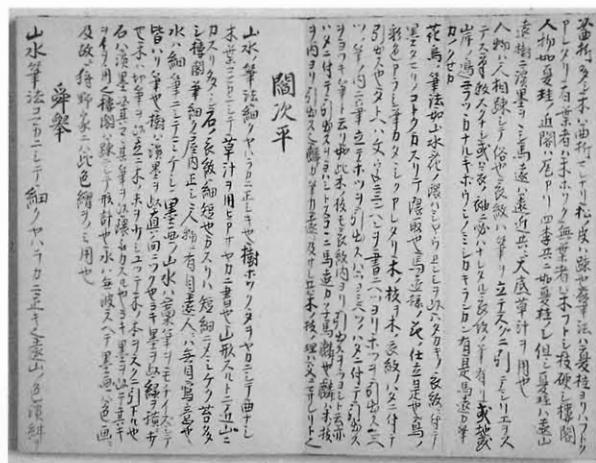
闇次平



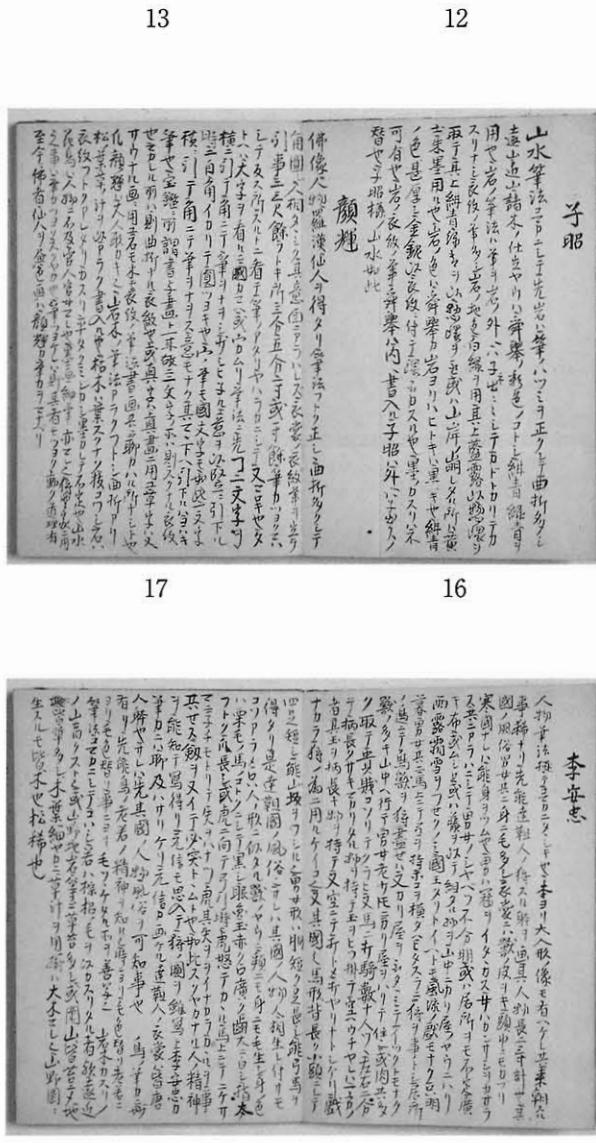
16



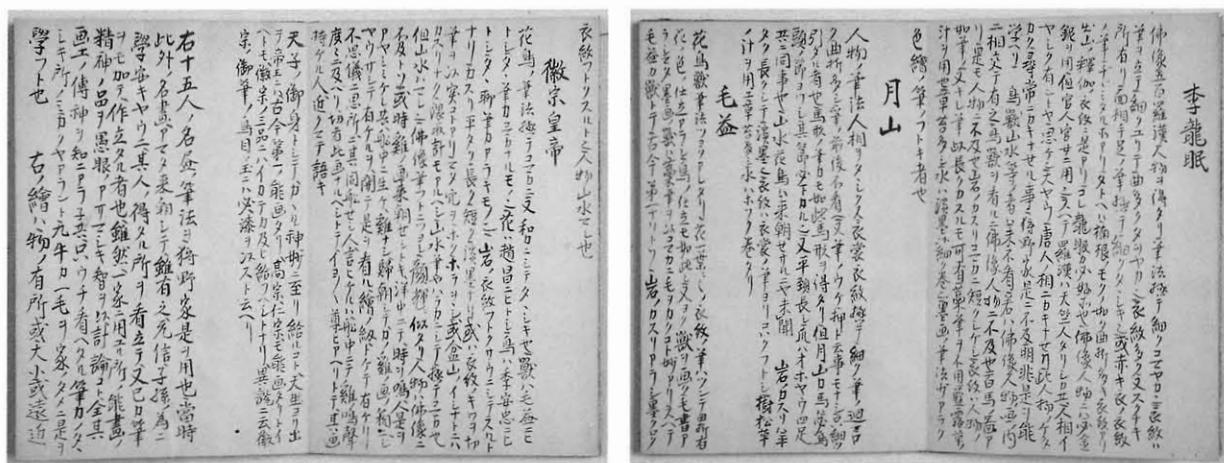
18



舜舉



20

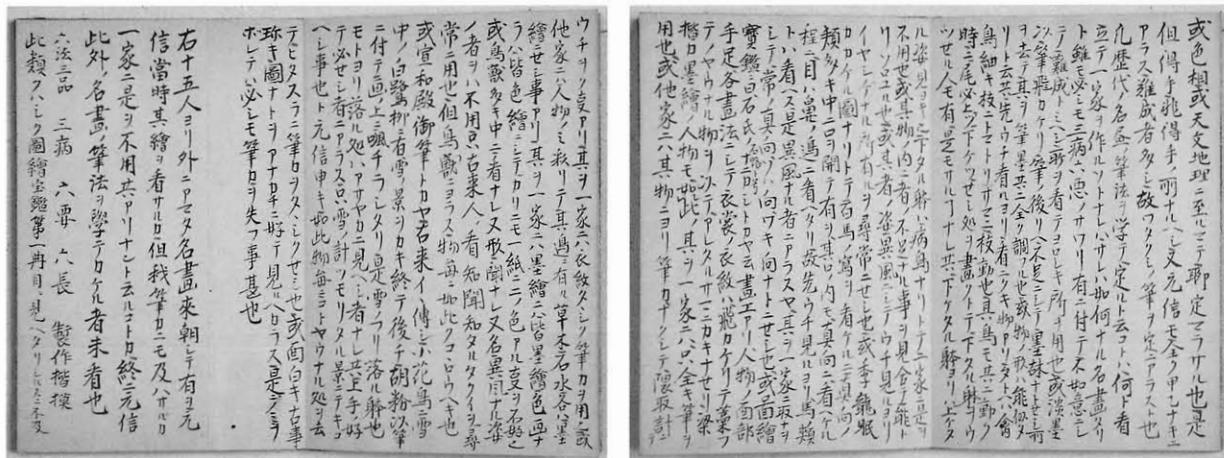


25

24

23

22



29

28

27

26



33

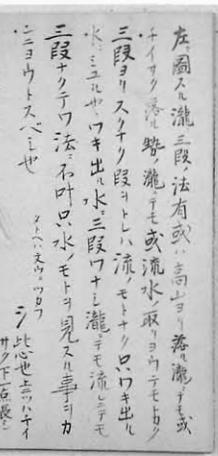
32

31

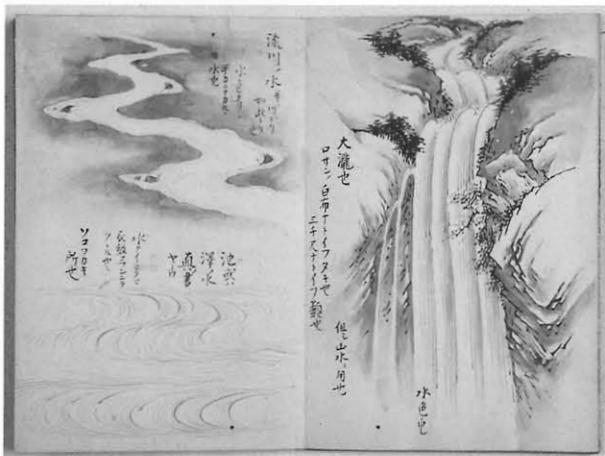
30



37

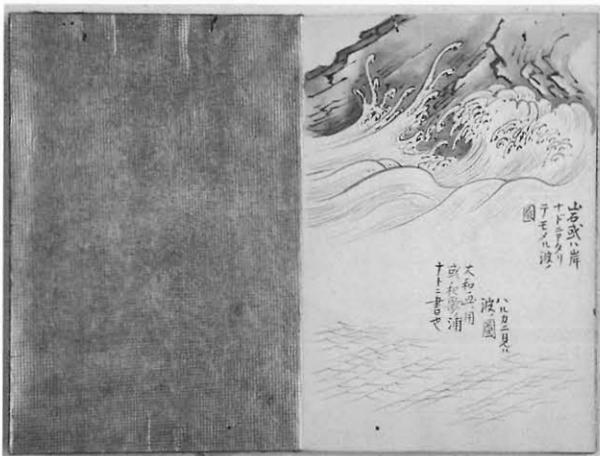


36

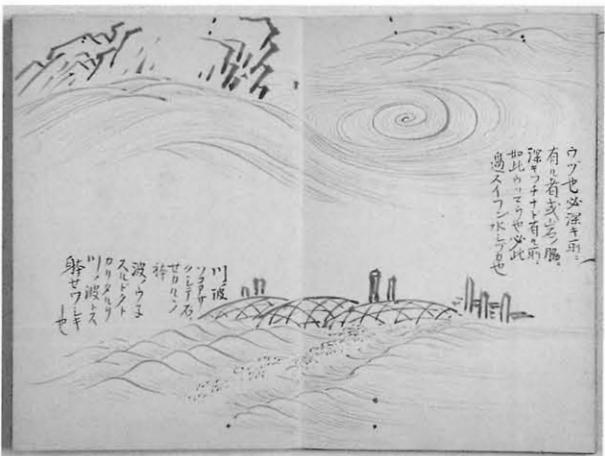


35

34

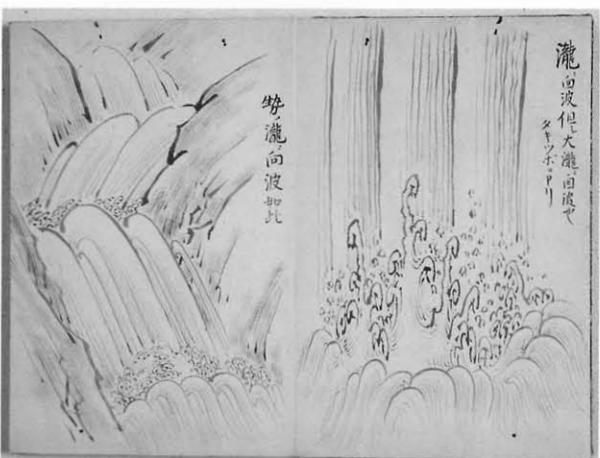


40



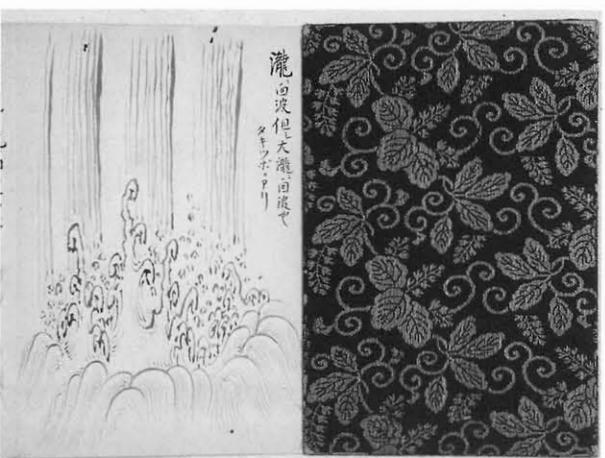
39

38



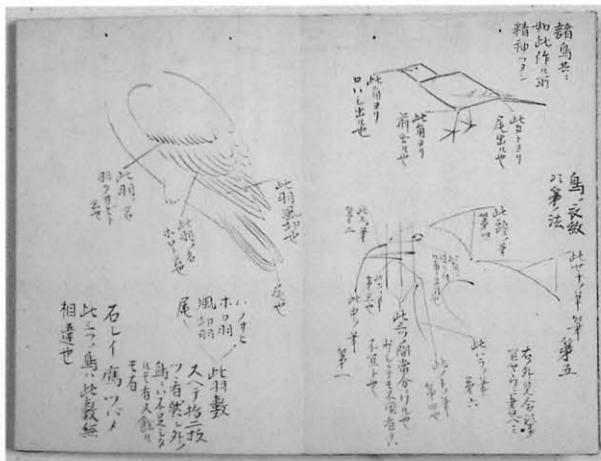
42

41



41

上帖裏面



46



44



50



48



54



51



58



56

55



62

61



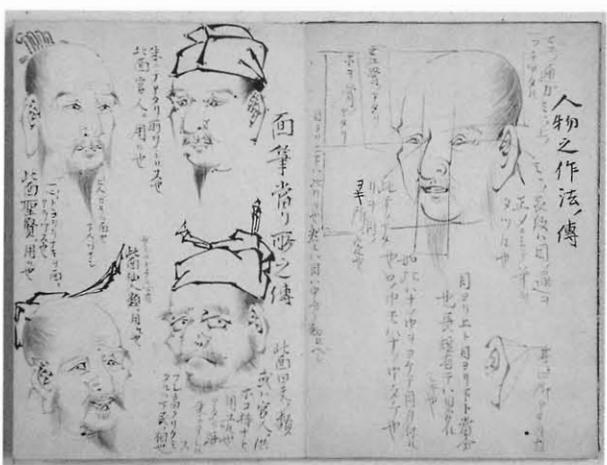
60

59



66

65



64

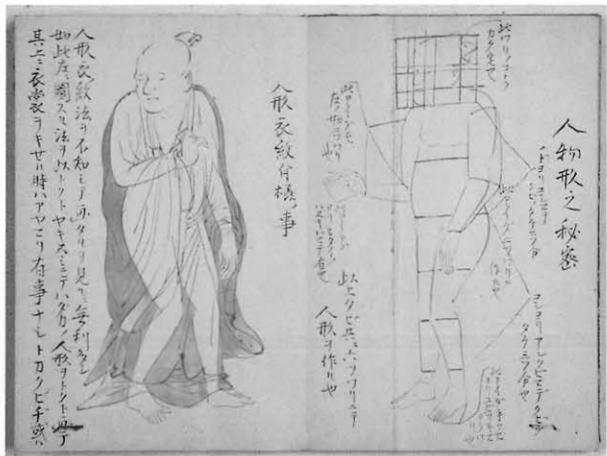
63



69



67



73



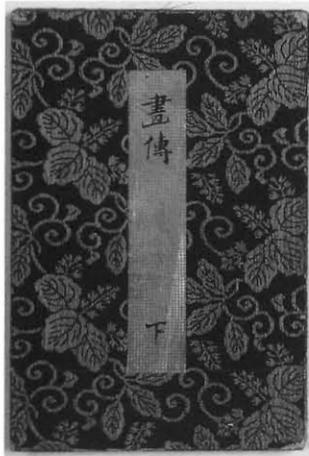
71



77



75



下帖の表紙



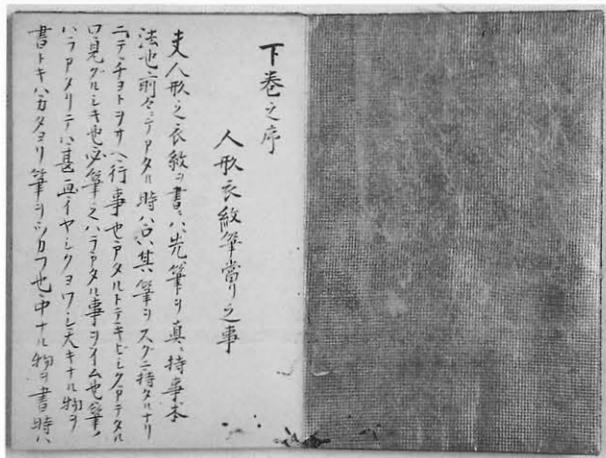
80

79



83

82



81

下帖表



87

86



85

84



91



90

88



95



93

92



99

98



97

96



103

102



100



107

106



104



111

110



109

108



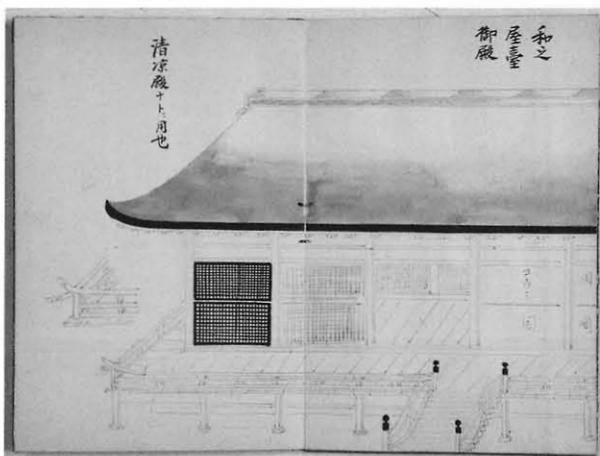
115

114



113

112



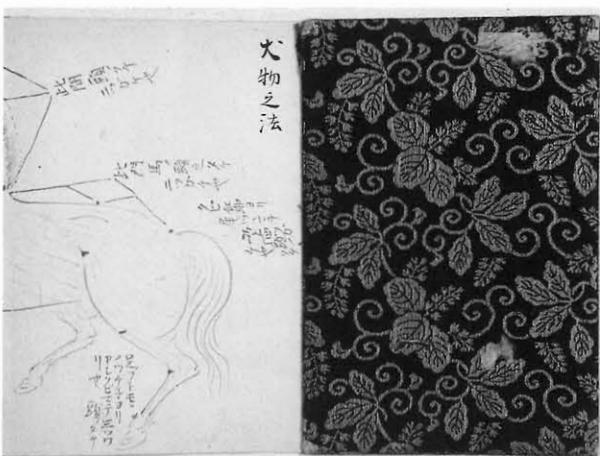
119

118



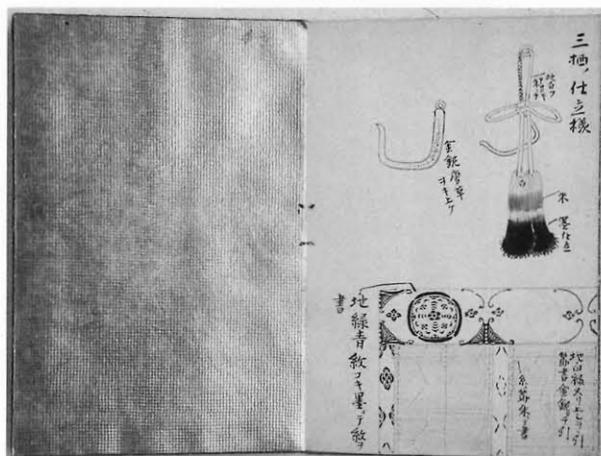
117

116



121

下帖表



120

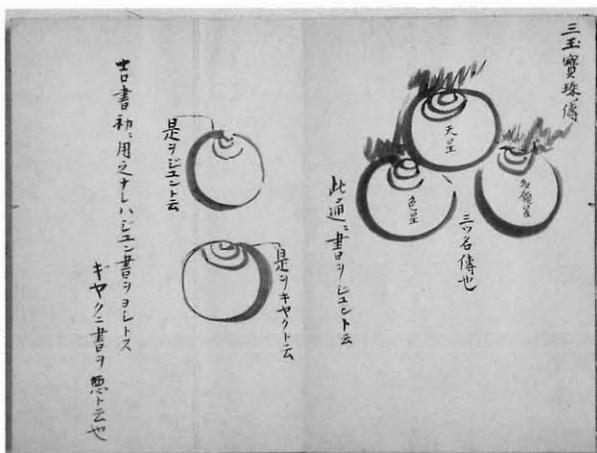
大物之法



124



121



127



125



129

130

## 狩野永良『秘伝画法書』翻刻

表紙題簽「画伝 上」

李安忠ヲ学、此外歴代ノ名画、雖多ト、大方／右各筆力ノ正キ中ニ、甲乙ヲ、択宜キ所ヲ用也。或ミタリニ意ノ工ミナル所

1

秘書序

夫画法世ニ雖有ト様々書物、超越前守元信ヨリ／伝ル所ノ秘密、不知他家ニ、我家古法眼元信ヨリ／松栄直信、永徳重信、修理亮山楽、縫殿助山雪、／縫殿助永納、縫殿助永敬、縫殿助永伯、縫殿助／永良マテ伝ル所ノ秘書也。然レ共、其許画道依テ

2

狹心ニ、此秘書一巻ヲ写シ相伝ル者也。然ル上者／当家伝來ノ秘本共、不残令内見者也。此／書スル所、無違變者也。

時二宝曆十三癸未年孟夏下旬

狩野縫殿助藤原永良謹白

白字方印「狩埜」朱字方印「永良印」

3

後藤行晴丈士

画法之事

狩野家ノ定筆法ノ事、全私ノ分別ニ不在、宋金元中ノ名画ノ学／筆法也。墨画山水人物ハ、牧溪、玉潤ノ学、筆法、但高然暉ハ山水ノ三用／也。墨画ノ花鳥ハ、学牧溪、色画ノ山水ハ、夏珪馬遠閻次平ヲ学、色絵ノ／人物ハ、顏輝、梁楷、李安忠、張思恭ヲ学、同官人、官女ノ風流ハ、李龍眠／月山ヲ学、色画ノ花鳥同小花鳥ハ、夏珪馬遠ヲ学、獸ハ徽宗毛益ヲ／学、花ハ舜摹、鳥ハ徽宗

ヲ去テ、ヒタスラニ筆力ノタ、シキヤウニ定ル也。惟意ヲ写ハ、失筆力ヲ、妙意ハ／自ラ出ルナレハ、先筆法ヲ第一トス。或ハ山水ニ至テ、人物ニ不至乎。或花／鳥ニ至テ木石ニ不至乎。或ハ墨画ニ至テ色絵ニ不至乎。如此右古來、必／得画、有不画ソコヲ択テ、草葉一葉鳥獸ノ一毛ニ至ルマテ、聊甲乙ナ／キヤウニ、作立シ者也。／遠山近山ノ有所、遠水近水ノ有所、滝泉川木石ノ有所、或ハ／大鳥小鳥、或ハ人物屋形、調度ノ有所ノ法ヲ定ム也。／山水ハ岩木ヲ為肝要遠近ハ細筆ニシテ疎ナレハ也。／人物 人相ヲ肝要トス。形ハ其人ニヨル。／男

シ髭（上ヒゲ）ゼン髯（ホウノ）シユ鬚（オトガイ）

ヲ肝要トス 女 髪釵ヲ肝要トス／武者 馬形ヲ肝要トス。鎧ハ写生。 花鳥 鳥獸ヲ肝要トス。岩木ハ筆力ニ有。

5

草花 花ヲ肝要トス。サカヘウツラウ所ヲ可知。 山深ク書。／水 浅深ノ岸キハ 岩 カスリ看三面ヲ。

木 マロク。

7

力サウニシテ、フトクヤハラカ也。衣紋ノ墨色、筆ヲ水ニテ洗テ、コキ墨ヲ筆ノ／サキニ付テ、引ハ次第ニ墨ハカレテ、水計ノコレリ。惣ノ衣ヲ薄キ墨ニテ、染シ／事マレナリ。若頭巾帶ナトニハ、薄墨引テ、衣紋隈取也。

／花鳥ハ、岩木藁筆ヲ用テ、木ハマロク、石アツク、衣紋ヲカスル。松葉藁筆／也。木葉淡墨而中隈取、墨タマリ有。草苔多シ。水ハ淡墨以、ヤワラカニ卷也。／立波ハ、藁筆以カク。衣紋惣隈取也。鳥ハ孔雀ノ尾、鶏ノミニ毛藁筆也。／鶏頭、彩ル、是、牧溪流也。又鶏ヲ淡墨以、草筆モ有。

右各筆法事

牧溪

山水ハ、墨ウスクシテ、藁筆ヲ用事、他ノ流ニマレ也。樹ハ藁筆ヲ／横ニ擊テ、近樹ハコキ淡墨以テ、双筆ニテ綠ヲ横ニ書也。山ハ腰マテ／薄シ。遠人無目、写意ス。石ハハラ筆以、衣紋ヲ書。同カスル。水ハ岸キハラ看セヨ。／遠水ニ無波、石ニハ苔有り。屋形ニ尾ナシ、暮ノ景ヲ写ス。嵐ニシラレテ、木葉タル、／ノ意ナルヘシ。

人物ハ、人相タ、シクシテ、衣裳、衣紋ノ筆、曲折ナシ。筆

李龍眠 色画仏像羅漢官人官女 子昭 色画山水岩  
顏輝 色画仏像仙人羅漢大人形 月山 色画人物馬形  
徽宗 色繪花鳥獸

6

牧溪 墨画山水人物花鳥 玉潤 墨画山水人物  
高然暉 墨画山水 夏珪 色画山水花鳥  
馬遠 色画山水花鳥 閻次平 色画ノ山水  
舜摹 色画山水花官女 梁楷 仙人耕作色画墨画  
毛益 色画花獸 李安忠 色画小人形或韓韁國ノ獮図  
鳥類

山水ハ墨ク口也。樹ハ藁筆ヲ立ニテ打、根ヲクマトリ、ヌレタル内ニコキ墨ヲ／以テ、綠ヲ立ニ打也。山ハ腰マテ墨シ、但遠山ハ、近山ニ、不連也。遠人無目、写／

意、石ハ蘆筆ヲ横ニ持テ、衣紋ヲ不書。筆ノ中ニコキ墨、薄キ墨ヲフクマ／セテ、一筆ニカク也。水ハ看テ岸際ヲ、波ナシ。屋形尾ナシ、朝ノ景ヲ写ナリ。／筆法ハ八軸ノ八景モ如此。人物ハ、墨クロシ。衣紋ノ筆フトクアレタリ。／黒キ衣ハ、衣紋ヲカ、ス、一筆也。人面ノ衣紋ヲ隈取コトナシ。目ハ突目也。木ハ／衣紋ナシ。石ハ山水ニ有ル筆法ノコトシ。石ハコケマレ也。スヘテ玉潤以来

至今二、人物ノ衣紋ヲ黒ク、一筆ニ画ク事、此法也。

#### 高然暉

山水ハ、墨クロニシテ、蘆筆ヲ不用也。山ハ先淡墨ニシテ、コキ墨ヲ以、筆ヲ／双テ突矣。谷黒ク、峯白シ。山ノ腰毎ニ以雲卷也。又淡墨ヲ以テ雲ノ／衣紋ヲ隈取也。遠山ハ、近山ニ不連也。樹ハウス墨ニテ双筆ヲ以、木葉ヲ／突其内ニ、遠樹近樹ノワカチアリ、木ハ筆力フトク、ヤハラカニ、枝スクナシ／石ハ、衣紋カキテカスリナシ。隈取計也。水ハ無波、山形ウツタカ／クシテ、丸ク重上ケテ、峯トガラズ、皆マロシ。スペテ高然暉カ、山水ハ／ヤハラカニシテ、筆力、雖疎ナリト、山ノ形、朝ノ景ヲ看テ立シトナリ。彩色マレ也キ。

#### 夏珪

山水、彩色ハ、山色堆色青シ。筆法コマカニシテ、ハヅンテツヨシ。遠山ハ／トカリテ如鉢ノ。近山ハ衣紋タ、シクシテ、峯高ク谷深シ。岸ノクゼタル所ハ、赤土色ニテ、山カケタル所多シ。石ハクゼタル所ハ、赤土色ニテ、山カケタル所多シ。石ハ三面ヲ看セテ／カスリ、イタ、キ黒シ、面ニヨリテ、必

左右ニカスリ分ツ也。色ハ山モ／石モ衣紋ヲ隈取テ、淡墨以、惣クマ取シテ、其上ヲ藍露（アイロ）ヲ以、惣隈／取シテ、或ハ山ノ根、石ノ根ヨリ、草汁ヲ以、クマトル也。又正面、或山岸ノク／ツレタル所ハ、黃土ヲ用也。苔ハコキ墨以突、又草汁以、相双テ突交也。／墨苔ノ中ニ、白綠以、突入ナリ。春夏ハ、綠青、秋ハ白錄、冬胡粉ニテ突／入也。但人物、花鳥ノ岩木ノ苔モ、如此、松ノ皮ウロコニ似テ、木立ハ曲折多シ。／小枝ハ、一筆ニヒトヘ也。葉ハ、菊花ノ如ニアラン。黃ナル草ノシルヲ以、惣クマ／取テ黒キ草ノ汁以、墨ノ間ニ書入ル也。諸樹ノ葉モ如此、色ハ遠近ノ／樹ニヨル也。樓閣ノ尾、柱カウシ、タ、シクシテ、屋ノ内ヲ見セテ、人物ハ目／アリ。遠人ハ目ナシ、写意。水ハ有波闊也。秋ノ景ハ、物ノ色サメリ。／樹葉色付テ、或秋風ニチリスキタリ。朱墨、黃土ヲ用ユル。芦／葉、黃土ヲ用、朱スミヲ以カキ入タリ。苔モ半枯タリ。冬ノ景ハ、空ノ色／淡墨也。山ハ谷黒ク、峯白シ。近山ノカスリハ、谷ニノコル、或ハ空ノ色ハ

10 物ノハタヨリ、淡墨ヲ以、広クマトリ出ス。其上ヲ藍露ヲ以、隈取出ス／也。寒木ハ、衣紋タ、シクシテ、カスリハ木ノカゲニノコス。上ノ方ニハ／雪アリ。小枝ハ朱スミ以書也。雪ハ紙色也。但物ノ衣紋ニ付テ、胡／粉以、ヒトエニカクベシ。花鳥、人物ヲ四季ニ書ハ如此也。／人物ハ、山水ニ不及、筆法ハ、墨クロクシテ、筆ヲ立テ衣紋ヲ不／曲筆コハシ。留所ヲ不捨、スミ画ハマレ也。ハラ筆ヲ不用。／花鳥ノ筆法ハ、人物ノ衣紋ノ筆コトシ。山岩木ハ、山水ノ如。筆／力、水ハコキ墨ヲ以、細ク卷テ、曲アリ。草苔多ク、草ノ汁以、書入也。樹／葉ノ色ハ、草汁以、惣隈取テ、其上緑青ヲ引テ、其

キテ、白綠ヲ以、中スチアリ／枯葉ハ、黃土ヲ用、朱スミ以、惣クマ、中濃葉スヂアリ。花ハ榮ヘ、ウツラウ／色ヲタ、シクシテ、筆力少アラン。鳥彩色、毛書モアラシ。人物ハ、花鳥

11 二不及、花鳥ハ、山水ニ不及也。 小花鳥ハ遠山近山遠木／近樹万物ノ四季共ニ、皆山水ノ如筆法ノ、梅、桃、梨ノ花ハ、ハタガキセ／スシテ、胡粉ヲ以、突ヘシ。柳春ハ、若枝ヲ、草汁以、カキマセテ、木目／ヲハ、草ノ汁以、コマカニ突。夏秋ハ、葉シゲシ。冬ハ、雪ヲモツ也。牡丹、／菊ハ、疎ニハタガキシテ、疎ニ色程、小鳥ハ一寸計也。小花鳥ハ、夏珪カ筆／來朝ス。狩トルナリ。 鳥ノ大小ノ事／鶴ハ田鳴程、雁ハ鶴野家始、是用也。

#### 馬遠

山水ノ彩色ハ、大底、如夏珪ニシテ、或近山、或岸ナドヲ、衣紋カ、ス／シテ、其マ、墨ヲ付テ、隈取テ、則其ヲ以、カスルモアリ。遠山ハサノ／ミトガラスシテ、堆ク青シ。近山ハ、衣紋正ク、カスリ長シ。石ハ黒クシテ、カスリ一方へ長ク、イタ、キ黒シ。スペテ馬遠ガカスリハ、一方ヘナ／カクカスルヲ、馬遠様ト云ヘリ。花鳥、人物ノ岩木皆、如此、水ハ淡墨

#### 12

以、曲折多シ。木ハ、曲折マレナリ。松ノ皮ハ疎也。筆法ハ、夏珪ヨリハフトク／アレタリ。有葉者ハ、木ホソク、無葉者ハ、木フトシ、枝硬シ。樓閣／人物、如夏珪ノ、近閣ハ尾アリ。四季共ニ、如夏珪ノシ。但シ、夏珪ハ、遠山／遠樹ニ、淡墨ヲ／シ。馬遠ハ、遠近共ニ、大底草汁ヲ用也。／人物ハ、人相疎シテ俗也。衣紋ハ筆ヲ

9

70

立テ、スクニ引テ、シリエヲス/テス。筆数スクナシ。或ハ、衣ノ袖ニ、必ハナレタル、衣紋ノ筆有リ。或地、或ノ岸ノ辺ニ、フツ、カナル、ギボウシ（擬宝珠）ノ、ミジカキランカン（欄干）有。是馬遠ガ筆／力ノクセカ。／花鳥ノ筆法、如山水、花ノ隈ハ、シャウエンジヲ以、ハタカキノ衣紋ニ付テ／墨ダマリノゴトク、カスリテ隈取也。馬遠様ノ花ノ仕立是也。鳥ノ／彩色アラシ。／引出ス也。タトヘハ文字ニ、ニンベント、書ニヘツヨリ、ホツヲ、引出スニ、ヘツノ筆ノ内ニ、筆立テ、ホツヲ、引出スハ、ツヨシ。ヘツノハタニ付テ、引出スヲ、ヨワキ筆ト云リ。如此木ノ枝モ、衣紋内ヨリ、引出スヲ、ツヨシト云、亦／ハタニ付テ、引出スヲ、ヨハシトス。コ、ニ馬遠カ子、馬麟也。麟ハ、木ノ枝ヲ、内ヨリ引出ス也。麟カ筆力、遠ニ及サレ共、木ノ枝ノ理ハ、父ニマサレリト也。

13

閻次平

山水ノ筆法、細クヤハラカニ正シキ也。樹ホソク、タヲヤカニシテ、曲ナシ。／木葉コマカニシテ、草汁ヲ用ヒ、アサヤカニ書也。山形スルトニ、近山ニ／カスリ多シ。石ノ衣紋、細短也。カスリハ短細ニシテ、シケク苔多シ。樓閣筆細ク、屋内正シ、人物ニ有目、遠人ニハ無目、写意也。／水ハ細筆ニシテ、シゲン。墨画ノ山水ハ、藁筆ヲ、モチイズシテ／皆ハリ筆也。樹ハ、淡墨ヲ以、真向ニツク也。コキ墨ヲ以、綠ヲ横ニ打／也。木ハ切筆ヲ以、立ニ木ノ末ヲ少シユツテ、木ノ本ヲ、スクニ引下ル也。／石ハ、淡墨以、其マ、其筆ヲ以、隈取カスル也。コキ墨ヲ以テ、其キ／ライヲ用也。樓閣ハ、疎ニシテ、形計也。水ハ無波、スヘテ墨画ハ、色画ニ／及故ニ、狩野家ニハ、此色絵ヲノミ用也。

立テ、スクニ引テ、シリエヲス/テス。筆数スクナシ。

山水筆法コマカニシテ、細クヤハラカニ、正キ也。遠山ノ色、淡紺ヲ

14

用、近山ハ、衣紋コマカニシテ、カスリハ、ワリ筆以突也。白緑以、衣紋ノ／見ユル程ニ、イカニモ、ウスクヌリテ、其上イタ、キヨリ、藍露以テ、惣隈／取テ、又其上紺青以、衣紋亦カスリナトノ見ユル程ニ、惣隈取テ、又／緑青以、山岩ノ根ヨリ疎ニクマトルナリ。又岩岸ナトノ面ノ赤土ノ／所ヲハ、黃土ヲ用、朱墨以、衣紋クマトルナリ。又山岸、岩ノ衣紋ヲハ／藍露以、隈取テ、其上、紺青、綠青ヲ以、仕立て、又金銀ヲ以、衣／紋ノ内ノ方ヲコマカニカキ隈取也。苔ハ、上三云コトシ。石ノ筆法ハ／マロクツクネタルヤウニ、コキ墨以、コマカニカキテ、綠青以、惣隈取／テ、草汁以、其間ニ書入ル也。枯葉ハ、黃土ヲ用、朱墨以、カキコム也。／松ノ皮、ウロコニ似テ、朱墨以、松皮ヲメン、ニ隈取ナリ。樓閣コマカニ／尾、柱隔子タ、シケンシテ、人物ニ有目、遠人ニハ、無目、写意也。衣裳ノ衣紋イカニモ、ホソシ。水ハ、淡墨ヲ以、タテワキノヤウニ、カクナリ。／水ノ色ハ、藍露ヲ以、淡色也。春夏ハ、青ク、秋冬ハ、淡白也。／大人形ノ筆法、極テ細シ。必官女ヲ得タリ。人相ハ清貞ノ相也。衣

15

子昭

山水筆法コマカニシテ、先岩ハ、筆ノハツミヲ正クシテ、曲折多シ／遠山、近山、諸木ノ仕立ヤウハ、舜拳ノ外ヘハネ、ネ出、シテ、カドトガリテカ／スリナシ。衣紋ノ筆多シ。岩ノ地色、白緑ヲ用、其上藍露以、惣隈ヲ／取テ、其上紺青、綠青ヲ以、惣隈ヲ取、或ハ山岸ノ崩レタル所ハ、黃土、朱墨用ル也。岩ノ色ハ、舜拳カ岩ヨリハヒトキハ、黒キ也。紺青／ノ色甚厚シ。金泥以、衣紋ニ付テ、隈取カスル也。墨ノカスリハ不／可有也。岩ノ衣紋ノ筆、舜拳ハ、内へ書入ル。子昭ハ、外へハネ出スノ／替也。子昭様ノ山水如此。

16

子昭

山水筆法コマカニシテ、先岩ハ、筆ノハツミヲ正クシテ、曲折多シ／遠山、近山、諸木ノ仕立ヤウハ、舜拳ノ外ヘハネ、ネ出、シテ、カドトガリテカ／スリナシ。衣紋ノ筆多シ。岩ノ地色、白緑ヲ用、其上藍露以、惣隈ヲ／取テ、其上紺青、綠青ヲ以、惣隈ヲ取、或ハ山岸ノ崩レタル所ハ、黃土、朱墨用ル也。岩ノ色ハ、舜拳カ岩ヨリハヒトキハ、黒キ也。紺青／ノ色甚厚シ。金泥以、衣紋ニ付テ、隈取カスル也。墨ノカスリハ不／可有也。岩ノ衣紋ノ筆、舜拳ハ、内へ書入ル。子昭ハ、外へハネ出スノ／替也。子昭様ノ山水如此。

重テ、クマトル也。スチアル花ニハ、筋ヲカク也。舜拳様ノ花ノ／仕立是也。木ノ葉、綠青ヲ用、或草汁以、仕立モアリ。木ノ衣／紋モホソク、コマカニシテ、或ワリ筆以、疎ニカスルモアリ。竹木ノ／葉共ニ、筆力コマカニシ／テヤワラカ也。山岩水ハ、山水、人物ニ云ルコトシ。スヘテ舜拳カ筆／法ハ、先其物ニ、能似テ、アナカシニ、筆力ノツヨキ事ヲ不好／筆ヲ立テ引所ノ、前後不見ヘシテ、ヒタスラニ、細筆ニシテ／タヲヤカ也。舜拳ハ、趙昌カ、弟子ニテ、趙昌ニハ及ハサレ共、山水ト／花ノ仕立様ノ看立、風流ナレハトテ、当家是ヲ用ル也。

也。鳥ノ羽ハ、隈取計ニテ、毛書ハ、イカニモコマカニシ／テヤワラカ也。山岩水ハ、山水、人物ニ云ルコトシ。スヘテ舜拳カ筆／法ハ、先其物ニ、能似テ、アナカシニ、筆力ノツヨキ事ヲ不好／筆ヲ立テ引所ノ、前後不見ヘシテ、ヒタスラニ、細筆ニシテ／タヲヤカ也。舜拳ハ、趙昌カ、弟子ニテ、趙昌ニハ及ハサレ共、山水ト／花ノ仕立様ノ看立、風流ナレハトテ、当家是ヲ用ル也。

重テ、クマトル也。スチアル花ニハ、筋ヲカク也。舜拳様ノ花ノ／仕立是也。木ノ葉、綠青ヲ用、或草汁以、仕立モアリ。木ノ衣／紋モホソク、コマカニシテ、或ワリ筆以、疎ニカスルモアリ。竹木ノ／葉共ニ、筆力コマカニシ／テヤワラカ也。山岩水ハ、山水、人物ニ云ルコトシ。スヘテ舜拳カ筆／法ハ、先其物ニ、能似テ、アナカシニ、筆力ノツヨキ事ヲ不好／筆ヲ立テ引所ノ、前後不見ヘシテ、ヒタスラニ、細筆ニシテ／タヲヤカ也。舜拳ハ、趙昌カ、弟子ニテ、趙昌ニハ及ハサレ共、山水ト／花ノ仕立様ノ看立、風流ナレハトテ、当家是ヲ用ル也。

17

顏輝

仏像、人物、羅漢、仙人ヲ得タリ。筆法フトク正シ、曲折多クシテ



大ニ白シ。指太／フトク、爪長シ。或虎ニ向テ弓引時、虎怒テカ、ル。馬上ニテニケサ／マニ、ネチモトリテ、矢ヲハナツ。虎其矢ヲライナカラ、カ、ルヲ、事／共セス。劍ヲヌイテ、必突ト、ムト也。如此スクヤカナル、人ノ精神／ヲ、能知テ写得リ。元信モ思入テ、狩ノ図ヲ雖写ト、李安忠カ／筆力ニハ、聊及ハサリケリ。元信力画ケル達靼人ノ衣裳ハ、皆唐／人体也。サレハ、先其國ノ人物、風俗ヲ可知事也。

鳥ノ筆力ニ妙／有り。

先能鳥ノ老若ノ精神ヲ知ル也。時ニヨリ、毛色替リ、老若ニ／ヨリ、毛色替リ、事ニヨリ毛ソ、ケタル所ヲ善写也。岩木カスリノ／筆法、コマカニシテ、コハシ。若ハ棕梠ノ毛ヲ以カスリタル者歟。遠近／ノ山高クスト也。或山、野、地、岩等、ニ草苔多シ。或岡山、皆苔ニシテ、地／皆草多シ。木葉、細ヤカニ、草汁ヲ用。樹ハ大木マレ也。山野岡ニ／生スルモ皆、木也、松稀也。

22

### 李龍眠

仏像五百羅漢、人物ヲ得タリ。筆法極テ細クコマヤカ也。衣紋ハ／筆ヲ立て、細クユリテ、曲多クタラヤカ也。衣紋多ク、又スクナキ／所有リ。面相手足ノ筆極テ、細クタ、シキ也。或赤キ衣ノ衣紋／ノ筆、チ、ミタル所アリ。トトヘバ、楠根ノモクノ如ク、曲折多キ衣紋アリ。／出山ノ釈迦ノ衣紋ニ是アリ。コレ龍眠カ必好所也。仏像人物ニハ、必金／泥ヲ用。但官人官女ニ用也。スヘテ羅漢ハ天竺入タリシカ共、人相イ／ヤシク有ントヤ、思ケン。大ヤウ、唐人ノ相ニカキナセリ、此人物ノケタ／カク、尋常ニカキナセル事、狩野家是ニ不及。明兆是ヲ能／学ベリ。鳥獸山水等ノ者ハ、未不看。若ハ仏像、人物ノ画ノ内／ニ相交テ有之。鳥獸ヲ看ルニ、仏像人物ニ不及也。百馬ノ因ア／リ。是モ人物ニ不及也。岩ノカスリコマカニ短クシケシ、衣紋ハ人物ノ／如筆

人、又キレ筆以、長クカスルモ可有。藁筆ヲ不用、藍露草ノ／汁ヲ用也。草苔多シ。水ハ淡墨以細ク卷也。墨画ノ筆法少アラク

23

月山

人物ノ筆法人相ヲタ、シクス。衣裳衣紋極テ、細ク筆ノ廻マロ／ク曲折多シ。筆ノ前後不看ヘ。又筆ノウケ、押ト云事モナシ、只細ク／引タル者也。馬形ノ筆力モ如此、馬形ヲ得タリ。但月山カ馬ハ、必鳥／頭ノ節ヨハシ。其筋必下カル也。又平頭長シ。爪ハオホヤウ四足／共ニ同事也。山水花鳥ハ、來朝セサルニヤ未聞。

岩ノカスリハ、平／タク長クシテ、淡墨也。衣紋ハ衣裳ノ筆ヨリコハクフトシ。樹松草／ノ汁ヲ用ユ。草苔多シ。水ハホソク卷タリ。

24

### 毛益

花鳥獸筆法ツヨクアレタリ。花一葉、ノ衣紋ノ筆ハツンテ曲折有／花ノ色ノ仕立アラシ。鳥ノ仕立モ如此シ。

又ヨク獸ヲ画ク毛書ア／ラシ。マタ墨画ノ獸ハ、藁筆ヲ以コマカニ毛ヲカクコト妙アリ。スヘテ／毛益カ獸トテ、古今第一ナリトゾ。岩ノカスリアラシ。墨クロク

モノ也。岩ノ衣紋フトクサウニシテ、スルト／ナリ。カスリ平タク、長ク、短ク、淡墨ナリ。或ハ衣紋ノキワヲ切／筆ヲ以突コトアリ。マタ穴ヲ、ホクホラヲ、シ。或盆山ノイシナドニハ／カスリナク、隈取計モアルヘシ。山水筆ヤハラカニシテ、極テコマカ也。／但山水ハマレ也。仏像筆フトニツヨシ。顔輝ニ似タリ。人物ハ仏像ニ不及トゾ。或時鷄ノ画、來朝セシトキ、洋中ニテ、時ヲ鳴、人是ヲ／アヤシミケレ共、船中ニ生ケ、鷄ナシ。

帰朝シテ、カノ鷄ノ画ノ箱ニ、ジ／ヤウサシテ有ケルヲ、開テ是ヲ看ル。絵ノ紐、トケテ有ケリ。／不思義ニト云事モナシ、只細ク／引タル者也。馬形ノ筆力モ如此、馬形ヲ得タリ。但月山カ馬ハ、必鳥／頭ノ節ヨハシ。其筋必下カル也。又平頭長シ。爪ハオホヤウ四足／共ニ同事也。山水花鳥ハ、來朝セサルニヤ未聞。

岩ノカスリハ、平／タク長クシテ、淡墨也。衣紋ハ衣裳ノ筆ヨリコハクフトシ。樹松草／ノ汁ヲ用ユ。草苔多シ。水ハホソク卷タリ。

25

天子ノ御身トシテ、カ、ル神妙ニ至リ給ルコト、天生ヨリ出／テ帝王ニハ、古今第一ノ能画タリ。高宗、仁宗、モ能画タリトイ／ヘトモ、徽宗ノ三品ニハイカテカ及ヒ給フベシトナリ。異説ニ云徽／宗ノ御筆ノ鳥目ノ玉ニハ必、漆ヲ以スト云ヘリ。

右十五人ノ名画ノ筆法ヲ、狩野家是ヲ用也。當時／此外ノ名画、アマタ來朝シテ、雖有之、元信、子孫ノ為ニ／画工ノ伝神ヲ知ニアラネ共、只ウチ看ヘタル筆力ノモ加テ、作立タル者也。雖然、一家ニ用ユル所ノ能画ノ精神ノ品ヲ愚眼ノアサマシキ智ヲ以、計論コト、全吉／画工ノ傳神ヲ知ニアラネ共、只ウチ看ヘタル筆力ノタ、／シキ所ノミ、カクヤアラント、九牛カ一毛ヲ家ノタメニ是ヲ／学フト也。古ノ絵ハ、物ノ有所或、大小、或遠近

花鳥ノ筆法極テコマカニ、又和カニシテタ、シキ也。獸ハ毛益ニヒ／トシ。タ、筆力コマカナルモノ也。花ハ趙昌ニヒトシ。鳥ハ李安忠ニヒ／トシ。タ、聊筆力アラキ

或色相或天文地理ニ至ルマテ、聊定マラサル也。是／但得手、非得手ノ所ナルヘシ。又元信モ全ク甲乙ナキニ／アラズ。難成者多シ、故ワタクシノ筆ヲ定ニアラスト也。／凡歴代ノ名画ノ筆法ヲ学テ、定ルト云コトハ、何ト看／立テ一家ヲ作ルソトナレハ、サレハ如何ナル名画タリ／ト雖モ、必シモ三病六惡ノサワリ有ニ付テ、不如意ニシ／テ、難成トミヘシ、所ヲ看テヨロシキ所ヲ用也。或淡墨／以、筆飛カケリ。筆ノ後リヘ、不足ニシテ、墨枯ナトセシ所／ヲ去テ、其ヲ筆墨共ニ全ク調フル也。或物ノ形ハ能似タ／リト云共、先ウチ看ルヨリ、看ニクキ物アリ。タトヘハ禽／鳥細キ枝ニトマトリ、サマニ、枝動也。其鳥毛共ニ動ク／時ニ、尾必上ケツ、下ケツ、セシ処ヲ画クトテ、下タル体ヲウ／ツセル人モ有。是モサル事ナレ共、下ケタル体ヨリハ、上ケタ

ル姿見ヨキ也。下ケタル体ハ、病鳥ナリトテ、一家ニ是ヲ／不用也。或其物ノ内ニ者ノ不足ナル事ヲ見合テ、能ト／リソロユル也。或其者ノ姿、異風ニシテウチ見ルヨリ／イヤシケナル所有ルヲ尋常ニセシ也。或李龍眠／カケル図ナリトテ、百馬ノ写ヲ看ケルニ、真向ノ／頬多キ中ニ口ヲ開テ有ヲ、其口ノ内モ、真向ニ看ヘケル／程ニ、目ハ鼻ノ辺ニ看ヘタリ。故先ウチ見ルヨリ、馬ノ頬ノトハ看ヘス。是異風ナル者ニアラスヤ。其ヲ一家ニ取ナヲ／シテ、常ノ真向、ソハ向、ワキ向ナドニセシ也。或國絵／宝鑑ニ曰、石氏ノ石恪ト号、ナニカシトカヤ云画工アリ。人物ノ面部／手足、各画法ニシテ衣裳ノ衣紋ハ、飛カケリテ蘿フ／テノヤウナル物ヲ以テ、アレタルサマニカキナセリ。梁／楷カ墨絵ノ人物モ、如シ此ノ其ヲ一家ニハ、只全キ筆ヲ／用也。或他家ニハ其物ニヨリ筆刀、ナクシテ、隈取計ニテ

ウチヲク事アリ。其ヲ一家ニハ衣紋タ、シク筆力ヲ用也。或／他家ニハ、人物ノミ彩リテ、其辺ニ有ル草木、石水、各ハ、墨／絵ニセシ事アリ。其ヲ一家ニハ墨絵ニハ、皆墨絵、色画ナ／ラハ、皆色絵ニシテ、カリニモ一紙ニノ色アル事ヲ不好也。／或鳥獸多キ中ニ、看ナレタリ／ト雖モ、必シモ三病六惡ノサワリ有ニ付テ、不如意ニシ／テ、難成トミヘシ、所ヲ看テヨロシキ所ヲ用也。或淡墨／以、筆飛カケリ。筆ノ後リヘ、不足ニシテ、墨枯ナトセシ所／ヲ去テ、其ヲ筆墨共ニ全ク調フル也。或物ノ形ハ能似タ／リト云共、先ウチ看ルヨリ、看ニクキ物アリ。タトヘハ禽／鳥細キ枝ニトマトリ、サマニ、枝動也。其鳥毛共ニ動ク／時ニ、尾必上ケツ、下ケツ、セシ処ヲ画クトテ、下タル体ヲウ／ツセル人モ有。是モサル事ナレ共、下ケタル体ヨリハ、上ケタ

右十五人ヨリ外ニアマタ名画采朝シテ有フ、元／信当其其絵ヲ看ザルカ、但我筆力ニモ及ハサルカ／一家ニ是ヲ不用共アリナント云ルコトカ、終ニ元信／此外ノ名画ノ筆法ヲ学テカケル者未看也。／六法三品 三病 六要 六長 製作楷模／此類クハシク国絵宝鑑第一冊目二見ヘタリシルスニ不及

(図7) 真ノ苔如此下ヨリ上ヘハネル也 三ツツ、也 (図8) 本体如此二本ツ、マタアリ (図9) 真岩カスリ如此 (図10) 此苔ハミナ緑青ニテホリヌリ (図11) 此類極真ノ苔也。極彩色ニ用之也。 (図12) 如此墨クロキ所ヘ苔ヲ付ル 峰 行ノ岩、此ノコトク

(図13) 勢ノ滝 キオイノタキ 谷ニセカレ段々ニ落ル体也

岩ニテハナク、タ、土ナレ共、氷ニテカタマリ、岩ノ岩ノ体如此ノ者、以是色々ニ作ル也。聊無理ナシ又山モスイフン、衣和ニカクベシ。

(図2) イタ、キニ苔ナシ。谷ノ所ニ苔有可シ  
〔朱書〕 イタ、キ 腰 正面 腰

(図3) 山モイタ、キニ苔ナシ。谷ノ苔ツキ、或ハ木ヲ紙ニノ色アル事ヲ不好也。／或鳥獸多キ中ニ、看ナレ

又形、聞ナレヌ名、異風ナル姿／ノ者ヲハ不用。只吉来人ノ看知聞知タルタクイヲ、尋／常ニ用也。但鳥獸ニヨラス。物毎ニ如此クコ、ロウヘキ也。／或宣和殿御筆トカヤ、古来イ、伝シ。小花鳥ニ雪／中ノ白鷺、柳ニ有。

雪ノ景ヲカキ終テ後チ、胡粉以筆／ニ付テ、画ノ上ニ、颯（吹）チラシタリ。是雪ノブリ落ル体也。／モトヨリ落ル處ハアヤカニ見ヘシ者ナレ共、上手ノ好／テ必セシ者ニアラス。只雪ノ計ツモリタル景ニテキコ／ヘシ事也ト元信申キ。如此物毎ニコトヤウナル処ヲ去

(図14) 草ノ岩如此

38-39

(図20) ヴヅ也。必深キ所ニ有ル者、或岩ノ脇ニ、深キ

フチナド有ル所ニ、如此ウツマウ也。必此辺、スイフン

水シヅカ也

(図21) 川ノ波、ソコアサクシテ、石ニセカルヽノ体

ナトイフ類也。但シ山水ニ用也  
水色白シ

形ヲ成。／依之、元信ハ、ヒシノ形ヲ鳥ノ本体トナス。  
此事左二圖／スルナレハ、能々考へ知ヘシ。其外、鳥ノ  
伝書シルス成。／皆元信ヨリ伝ル所ノ秘事也。

(図16) 滝川ノ水、并ニ川ドリ如此トル也

35

水色青シ。平カニナカル、水也

(図17) 池或ハ沢ノ水真ノ書ヤウ

水アイロクマ、衣紋コフンニテク、ル也。 ソコフカ

キ所也

36-37

左三圖スル滝ニ三段ノ法有。或ハ高山ヨリ落ル滝ニテモ  
或ノチサク落ル。勢ノ滝ニテモ、或流水ノ取りヨウテ  
モトカク／三段ヨリスクナク、段ヲトレハ、流ノモトナ  
ク、只ワキ出ル／水ニミユル也。ワキ出ル水ニ三段ワナ

シ滝ニテモ流レニテモ／三段ナクテワ、法ニ不叶只水ノ

モトヲ見スル事ヲカ／ニヨウツベシ也

タトヘハ文ウニツカフ。

シ此心也。上二ツハチイサク下一点流シ。滝モ此意ヲ  
写ス也。

(図18) 大海ノ波也

波モ三段ニ書意也。スペテ水ハ、三段ヲ、ワスレヌヤウ  
ニスベシ

又曰、波ニテモ、但平カノ水ニテモ、ヲモノ衣紋ヲ、フ  
トクカキテ、小筋ワ、スイブンホソクカク也

(図19) 大海ノ波、遠ク見図

40

(図22) 岩或ハ岸ナドニアタリテ、モメル波ノ図

(図23) ハルカニ見ル波ノ図

大和画ニ用。或和歌ノ浦ナトニ書也

〔上帖裏面ここまで〕

〔ここから上帖裏面〕

41

(図24) 滝ニ向波、但シ、大滝ニ向波也。 タキツボニ  
アリ

此三ツノ間、当分ニワル也。少シニテモ不同有テハ不宜  
ト也

右ノ外見分次第宜ヤウニ書ベシ  
此角ニ目ヲ付ル事、定法也

42

(図25) 勢ノ滝ニ向波如此

43

(図26) 川ノ岸キハノ波、或ハ吉野川ナトニ用ル也

44

(図27) 海の浜、或ハ磯、或ハ平砂ノ所ヘヨスルナミ也

45

(図28) ※羽の種別と羽数について図示、注釈

46

(図29) ※鳥の描き順と配分等を図示・注釈

47

(図30) ※羽の種別と羽数について図示、注釈

48

(図31) 15図 ※鳥の飛ぶ姿の変化を図示、注釈

鳥ノ形スヘテ玉子ノ形ヲ本体トス。然リトイヘトモ玉子  
ノ形取ヤウアシケレハ、必、鳥ノ形丸クコエテ病鳥ノ  
ヘル勢

下リサマニ見カヘリ、共(友)ヲヨブ勢 中ニテイカ  
ル勢 下ニ物有ラ見ル勢

スクニ行、下ヘラリントスル勢 横ヘ一文字ニハヤク  
トブ勢 花ニタハムレル体

上ヨリクタル勢 只ナニトナク向ヘ行勢 橫二行テ  
俄ニ上ヘ行勢

下ヘ一文字ニ下ル勢 上ヘハヤクノボル勢 シツカ  
ニ横ヘ行勢

横ヘイサミテトブ勢 49-50

上ヨリクタル勢 只ナニトナク向ヘ行勢 橫二行テ  
俄ニ上ヘ行勢

下ヘ一文字ニ下ル勢 上ヘハヤクノボル勢 シツカ  
ニ横ヘ行勢

横ヘイサミテトブ勢 49-50

上ヨリクタル勢 只ナニトナク向ヘ行勢 橫二行テ  
俄ニ上ヘ行勢

下ヘ一文字ニ下ル勢 上ヘハヤクノボル勢 シツカ  
ニ横ヘ行勢

横ヘイサミテトブ勢 49-50

(図32) 14図 ※鳥が枝等にとまる姿の変化を図示、注  
釈

諸鳥共ニ、左ニ國スル形ニコトヨセテ、作ル也。凡、飛  
鳥ハ如此也。

枝ニトマル、或ハ下ニ居ル形ヲ図

スナヲニトマル勢 スナヲニトマリ下ラノソク勢  
羽虫ヲセ、ル勢

スナヲニトマル後向ノ体 トビキタリ、只今トマル体  
トマリナガラサハ(験)ク体

子ニエ(餌)ヲクハス体 ヲヤ 子 子

玉子ヲアタ、メル体 枝ニトマリテ下ラ見ル体 只

地ニ居テエヲヒラウ体 トマリテネムル体 ト

(飛)ハントスル体 中ニテエヲアラ(争)ソウ体

鳥ノ尾頭ニ、伝有リ。頭ヲ上ル時ハ、尾モトモニ、尾先

上ル、又頭下ル/トキハ、必、尾サキモ、共ニ下ル也。  
只ナニト無居ル時ハ、頭モ尾モ/スグ也。

(図33) ※鳥の姿勢、頭と尾の関係について図示

尾頭ノツカイカタ如此也。此事ハナレテハ法ニソムケ  
ル也

(図34) ※足の指が二本ずつ左右に分かれる鳥の足を図  
示

スヘテ此通ノ鳥エビ、長短ナシ当分也。如此足ノユビ二  
本ツ、左右ヘ別鳥有

鳳凰、音呼、ヲ、ム鳥 鳥、鸞、ミ、ツク 此類ノ  
鳥、図ノコトク二一本ツ、別ル也

(図35) 2図 ※鳥の足の描き方を図示

節ヨリ下二ツ分、節ヨリ上一ツ分也。此間三ツワリ也

鳥ニヨリテ、此ヒカヘツメ、コトノ外、長キ鳥、小鳥ノ  
ウチニモアレ共、見クルシキユヘ不写也

千鳥ト駄鳥トニハ、如ヒカヘツメナシ

(図36) ※口を開けた鳥の描き方を図示

如此、口アキタル鳥ヲ書時、タトヘハ鶴ニテモ、シタ  
(舌)ヲ書タル有。此事ヲイムヘシ。シタ出タルワ死鳥  
ナリト云也

(図37) 2図 ※眠る鳥の目の描き方を図示

ネムル鳥ノ目如此 鳥ノ目ハネムル時、下ヨリ上ヘフ  
サグ也

人ハ、上ヨリ下ヘフサグ。此ワケ知ベシ

トクトネタル鳥ノ目、如此 ユエニ如此、目ヲ書也

(図38) 梅ノ木カスリ

并ニ梅花木体 如此ナル物ヲ五ツヨセテ作ル也

一重ノ花ハ、イツニテモ、此間スケテウラノウテナノ色  
(ヲ)見ル

必、緑青ニテツク也

如此、枝ノ後、書タル花ハ、イツニテモウラ也

(図40) 桃ノ木ノカスリ

桃花ノ書ヤウ 花ノ本体如此也

(図41) 桜木ノカスリ

如此、サクラハ、花ト葉ト別ニ出ル者也

(図42) 海棠ノ木立、如此

木カスリニテ、木ニ丸ミヲ見スル事伝也。カスリノ付形  
ノミニ、心ヲ付ベシ。

(図39) ※松の樹皮の描法を図示

木ニモ三面ノ意ヲ以テ書ベシ 松ノ木カスリノ本体如  
此也

木カスリニテ、木ニ丸ミヲ見スル事伝也。カスリノ付形  
ノミニ、心ヲ付ベシ。

(図40) ※松の樹皮の墨限取りによる描法を図示

木ノ墨クマ、如此取也

(図41) 梅ノ木カスリ

脇 見付 脇

(図42) 桃ノ木ノカスリ

脇 見付 脇

(図43) 桜木ノカスリ 海棠モ同カスリ也

如此、サクラハ、花ト葉ト別ニ出ル者也

(図44) 海棠ノ木立、如此

(図45) 桐ノ木カスリ、如此

59  
60

(図46) 柳ノカスリ、如此也

57

(図47) 立田ノ紅葉

48

(図49) 高尾楓葉ノ生写

50

(図50) モミヂノ木カスリ

61  
62

(図51) 杉ノ木カスリ

52

(図52) マキノ木カスリ

53

(図53) 檜ノ木カスリ

63

(図54) 人物之作法ノ伝

マユノ通ガミノ上ノフチニアタル

マユ骨ノアタリ

ホヲ骨ノアタリ

此筆ノアタリヲ、目ノヲキ所ニ定也

目ヨリ上下ハ、此ワリ也。然レハ、目ハ中分ト知ルベシ

目ヨリ上ト、目ヨリ下ト、当分也。長短有テハ、見クル

シキ也

如此、ハナノ巾ヲヨケテ、目ヲ付ル也。口ノ巾モ、ハナ

ノ巾タケ也

ミ、ノ衣紋ハ、目ノ通ヲ、正シクニシテ、筆ヲタツル也

[耳部分図] 耳ニ四所アタリ有

64

面筆当リ所ノ伝

(図55) 朱ニテアタリ、所ヲシルス也。此面官人ニ用ル

也

(図56) 此面、田夫ノ類、或ハ官人ノ供。ホコ持ナトニ

用ユル也。アタリ所、朱ニテシルス。フシ高クリク

ミタルハ、下民ノ相也

(図57) 上人ニカキル面也。下人ニワナシ。一心

ニ、ト、コヲリナキヲ、面ニアラワス也。此面、聖

賢ニ用ル也

(図58) 少シ、ヲドケル心有。此面、仙人類ニ用ル也

65

(図59) 極老人ノ面也。或、九老ナトニ用ユル也。

筆アタリヲ、シ。ニク、ヲトロエテ、ホネ、タカクアラ

ワレタル体也。ヨク、カンカエ書ヘシ

(図60) 若キ人ノ面。筆アタ、ヤハラニカク也。スルト

ニテハ、老人ニ似ル也

(図61) 老母ノ面。筆意、キヤシヤニシテ、スルトニ書

也

(図62) 童子ノ面。隨分、筆意ヤハラカニ、マロク書也

66

(図63) 正面向也。左右ヲ當分ニ書事、カン用也

(図64) ウツムク面。目ハナ口ノ間、スイ分セマキカ吉

(図65) トントアラヌク空ヲ見ル面

(図66) 横向ノ面。真横ノ体

(図67) 七分ホド後面、少シ面ヲ見スル體

(図68) 真後向也

(図69) 九分程後面顔

(図70) 物ヲ、フキ出ス体。或ハ、テツカイナドニ用ル

67

此ワリノゴトク、カク定也

ノドヨリコシマテ、クビノタケニツ分

コシヨリアシ

クビマデ、クビノタケニツ分也

此アイダニツワリニ作ル也。此アイダ手クビヨリ、ユ

(図72) 昆沙門天、其外天夫ノ顔ニ用ル

(図73) 祖師ノ図。禪ノ祖師ニ用之

(図74) 同祖師ニ、モチユ也

(図75) 羅漢ニ用ル面

(図76) 同羅漢之顔也

(図77) 天夫天童ニ用之

(図78) 仏像、釈迦、弥陀ノ類ニ用之

(図79) 天女ノ類、菩薩。但シ天女ニハ、ヒヤクコウ

(白毫) ナシ。

(図80) 觀音ニ用

(図81) 官女ノ面

(図82) 同官女ノ面

(図83) 官女真向顔

(図84) 真横向ノ面

(図85) ネムル面

(図86) コトノホカナケク面。或ハ、ネハン(涅槃)ナ

トニ有ベシ

(図87) 大キニ笑面。或ハ、虎ノ三笑、或ハ、月下ノ大

笑ナドニ用ル面也

70

71  
72

73

(図88) 人物形之秘密

此ワリノゴトク、カク定也

ノドヨリコシマテ、クビノタケニツ分

コシヨリアシ

クビマデ、クビノタケニツ分也

此アイダニツワリニ作ル也。此アイダ手クビヨリ、ユ

ビサキマデノワリ也

此アイダモ、左ノ如、ニツワリ也      此アイアゴヨリ、

ヒタイノハエキハマテ有也

以上クビ共ニ六ツワリニテ、人形ヲ作ル也

74

(図89) 人形衣紋付様ノ事

人形衣ノ紋法ヲ不知シテ、画タルヲ見ルニ、無利(理)

多シ。／如此左ニ図スル法ヲ以、トクト、ヤキスミニ

テ、ハダカノ人形ヲ、トクト画テ、／其上ニ、衣裳ヲキ

セル時ハ、アヤマリ有事ナシ。トカクヒヂ或ハ

75  
76

ヒザカシラ其外カトノ有ル所ニ筆意付テ書ベシ。

此法狩野家第一ノ法ニテ人形作法ノ奥儀也。

(図90) 座ス人形如此  
ヤキスミニテ形ヲトクトアテ置、其上ニ衣裳ヲ付ル也  
但、古人名人ノ画置図ヲ写ニハ此サシテ用ユルニ、不及  
トカクアタラシク作ル時ハ、此法ヲ以、作ル也。必無利  
(理) 有リトイフ事ナシ。

77  
78

(図91) 臥体

此図モ左ノ人形ノワリヲ／以トク。ヤキフデニテ、／人  
形ハダカノ形ヲ付テ、／其上ヘ、衣裳ヲキセル也。／高  
キ所ニシワナシ。ヒク／キ所、或ハ、タマリタル所ニ／  
シワ有。其事ヲ能々／カンカヘテ、衣紋ヲ／付ベシ。

(図92) 横向ノ座スル人形作法  
79  
80

ワリ合、トカク左ニシルス如

手足ドウタイノ長短ヲ、能吟味スペシ。是ニアヤマリ有

テハ、必カツコウアシキ也。

下巻ニ、衣紋、筆アタリ所、山水、屋形、獸類之定法、

其外、古事、秘密之事ヲ、シルス也

秘密之書、上ノ巻之終

「上帖、ここまで」

(図93) 衣紋アタリ所ノ事  
アタリ所、朱ニテシルス也

筆ノアタリ所ヲシルス／也。トカク角々、又ハ、マ／ガ  
リタル所、必アタルト／知ベシ。定ルアタリ所ハ

両方ノカタ、／両ノヒジ、或ハコシ、両ノヒザガシラ、  
或ハスゾ、袖口ノ角々ナト、定ル／アタリ所也ト知ルベ

シ。

両方ノカタ、／両ノヒジ、或ハコシ、両ノヒザガシラ、  
或ハスゾ、袖口ノ角々ナト、定ル／アタリ所也ト知ルベ

シ。

衣紋筆意ニ曰、ヲサユル所、アタル所ニ様有、能々可得  
心也。

(図94) 此筆意皆アタル筆也。

仙人、賢人、聖人ニハ、此筆意ヲ用ユル也。

(図95) 此筆意皆ヲサユル筆也。

仏像ニハ、多ク此筆意ヲ用ユル也。

81

下巻之序  
表紙題簽「画伝 下」

82

夫人形之衣紋ヲ書ニハ、先、筆ヲ真ニ持事、本／法也。  
前々ニテ、アタル時ハ、只其筆ヲスグニ、持タルナリ／  
ニテ、チヨトヲサヘ、行事也。アタルトテ、キビシク、  
アテタル／ワ、見グルシキ也。必筆之ハラ、アタル事  
ヲ、イム也。筆ノ／ハラアタリテハ、甚画、イヤシクヨ  
ワシ。大キナル物ヲ書トキハ、カタ（肩）ヨリ筆ヲ、ツ  
カフ也。中ナル物ヲ書時ハ

83

(図96) 此筆意ハ、祖元信力用ル所ノ梁楷様也。  
仙人類ニハ此筆意ヲ用也。

(図97) 聖賢、官人ニ、此筆意ヲ用也。

唐子ニモ用  
ル也

イハレワ、神妙成筆意成力故也。

84

(図98) 官女ニ、此筆意ヲ用。頬輝様也  
天衣 カラ絹 カラキヌ ウワキ ウンゲン  
コシアテ フチ 緑

85

ヒジョリ、筆ヲツカウ也。至テ小サキ物ヲ書トキハ、手  
クビニテ、筆ヲツカウ也。  
又曰、真行草ニ依テ、筆ノ持所違也。真之／衣紋ヲ書ト  
キハ、筆ノ元ヲ持也。行之衣紋ヲ書／時ハ、筆之袖ノ中  
程ヲ持ガ吉也。草之衣紋ヲ書／トキハ、筆之末ヲ持也。  
是、真行草、第一之、秘／密也。謹テ可得心者也。

86  
87  
88  
89

和人形之事

(図99) 十六才ヨリ十八才マデハ、如此マユナシ。此分

多ク殿上人也。

(図100) 十八才以上ハ、イツレモマユ有。公卿也。

(図101) 六位也。隨人也。

ホソエイトテ、武官ニ用ユル物也。 ライカケ

(図102) 白丁也、或ハ笠持、スペテ雜人也。

98  
99

(図103) ケツテキ也。武官ニ用ル

地紋ワナシ也 藤原高光ナドニ用ユル也

朱 墨 太刀ノ仕立初二同 地朱 紋丹ニテ書

上ノハカマ、初ノ束帶ニ同シ仕立也。 朱

(図104) 草之山水、此風儀ヲ用。牧溪様也。トカク墨遺

ラサキ

(図105) 狩衣 風折鳥帽子

白 地緑青 紋草之汁 ヒシカラクサ 白シ ム

(図106) 山水作法物之墨所

此辺近キ景 山ノキシ 山ノダケ 山ノ岩 道 屋形

門 山寺 遠山

次ノ遠 峯 中バニ見ル遠山 霞 村 浜岸 魚夫

(図107) 行ノ山水、書ヤウ同、遠近ヲ分ツ事ヲ大事ト

ス。元信用之、夏珪カ風儀也。

100 - 101

90 - 91

(図108) 行ノ山水、書ヤウ同、遠近ヲ分ツ事ヲ大事ト

ス。元信用之、夏珪カ風儀也。

ホソエイトテ、武官ニ用ユル物也。 ライカケ

(図109) 衣冠圖 イクハン ホラ也。常ノ将束

地黒仕立左ノ如 エイノ仕立モ、左ニ同シ

地アサギ、紋ゴフン 黄土 朱スミクマ

浮線蝶 地白、紋銀泥 金泥 朱スミ クマ

白 朱 サメ、コフンニテツク ヒモ、アサギ 五色

ニテ 筋書

黒シヤウ東ヒナタクマ取ヤウ、何ニテモ如此。地紋ワリ

付ヤウ、ナニニテモ如此也。

92 - 93

(図110) 束帶之衣紋 神事政事ノ装束也

浮線蝶 地白、紋銀泥 金泥 朱スミ クマ

白 朱 サメ、コフンニテツク ヒモ、アサギ 五色

ニテ 筋書

黒シヤウ東ヒナタクマ取ヤウ、何ニテモ如此。地紋ワリ

付ヤウ、ナニニテモ如此也。

94 - 95

(図111) 衣冠圖 イクハン ホラ也。常ノ将束

地黒仕立左ノ如 エイノ仕立モ、左ニ同シ

地アサギ、紋ゴフン 黄土 朱スミクマ

(図112) 直衣之図

衣コフンニテ、墨クマノコトク、クマヲトリテ、衣紋ヲ

胡粉ニテク、リ、地紋銀泥ニテカク也

地白 紋銀泥 アサギ 紋コフンニテカク

アサギヌリ、ウスアイニテク、リ、クマ

朱

96 - 97

(図113) 同十二一重之図 彩色左ニ同シ

104 - 105

(図114) 山水并ニ屋形ノ法

真之山水、当家ニ用ユル風儀也。只遠近ノアジワイヲ、  
カン用トス

116

(図115) 屋台之事

真之唐屋台 唐之殿上ナリ

タルキ(垂木)ノコロ也

117

(図116) 行之屋台書ヤウ

114 - 115

ハルカニ高シ遠山ニ、シハナシ、遠樹木不書。只風景ヲ  
第一トス。墨クマ遠キ所程次第ニウスク隈取、近キ  
所墨クマコク取事、第一之法也。

リ

(図117) 屋台之事

タルキ(垂木)ノコロ也

108 - 109

(図118) 行之屋台書ヤウ

118

(図119) 草之屋台書ヤウ

119

(図12) 和之屋台御殿 清涼殿ナトニ用也  
コウシ(格子) 同

120

(図12) 三栖ノ仕立様  
地白フアサキ朱ニテ 白 朱 墨仕立

121

(図12) 金泥唐草ヲキ上ヶ  
地白フアサキ朱ニテ 白 朱 墨仕立

122

(図12) 地緑青紋コキ墨ニテ紋ヲ書  
地白緑ヌリ上シヲ、引筋書金泥ニテ引  
糸ノ筋朱ニテ書

123

(図12) 下帖裏面  
〔下帖裏面ここまで〕

124

(図12) 犬物之毛書如此  
糸ノ筋朱ニテ書

125

(図12) 犬物之法  
犬物ヲ定ルニハ頭ニテ惣身之タケヲ定ムル也  
何ニヨラス此ワリニテ犬物ヲカク也  
万ノ犬物馬ノワリヨリ初ル也

126

(図12) 犬物之法  
犬物ヲ定ルニハ頭ニテ惣身之タケヲ定ムル也  
何ニヨラス此ワリニテ犬物ヲカク也  
万ノ犬物馬ノワリヨリ初ル也

127

(図12) 三玉宝珠ノ伝  
天星 多願星 色星  
三ツ名伝也

128

(図12) 三玉宝珠ノ伝  
天星 多願星 色星  
三ツ名伝也

129

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

130

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

131

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

132

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

133

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

134

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

135

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

136

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

137

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

138

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

139

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

140

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

141

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

142

(図12) 火煙ニ伝有  
左ニ國スル通、トカク左ヨリ右ヘ々、ト廻事、大ジ也。  
ジユンニ書事、カンニヤウ也  
不動尊ニ用ル也

■凡例  
1. 頭書のアラビア数字は頁をしめし、上帖表→上帖裏→下帖表→下帖裏の順に通しの頁番号とした。○  
2. 図は(図XXX)と登場順に連番をほどこした。1頁に複数の図がある場合は、右から左、上から下への順番を基本とした。

3. 図31、図32のようにひとまとまりのものについては、括してひとつの図番号をほどこした。

4. テキストには、朱で句点が打たれており、それをもとに内容を理解しやすいよう句読点をほどこした。  
( ) 内に漢字を註記した。

5. カタカナがつづいて意味のとりにくい部分には、適宜、  
6. 異体字・旧字は、基本的に新字に改めた。  
7. 明らかな誤字は、文意に沿って改めた。

8. 返り点は、省略した。  
9. 圖解内の色註で繰り返し登場するものは、煩雑を避け、ひとつだけ記した。

10. 紙面の都合により、1-29頁の改行は／でしめした。